

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第116集

東久保遺跡Ⅱ 東久保古墳群1号墳 宮田遺跡Ⅱ

長野県佐久市大字平賀東久保遺跡Ⅱ発掘調査報告書
長野県佐久市大字平賀東久保古墳群1号墳発掘調査報告書
長野県佐久市大字瀬戸宮田遺跡Ⅱ発掘調査報告書

2004. 3

佐久市土地開発公社
佐久市教育委員会

東久保遺跡Ⅱ 東久保古墳群1号墳 宮田遺跡Ⅱ

長野県佐久市大字平賀東久保遺跡Ⅱ発掘調査報告書
長野県佐久市大字平賀東久保古墳群1号墳発掘調査報告書
長野県佐久市大字瀬戸宮田遺跡Ⅱ発掘調査報告書

2004.3

佐久市土地開発公社
佐久市教育委員会



東久保遺跡の地形（南から）



東久保遺跡の弥生時代後期集落



東久保古墳群 1号墳の地形



東久保古墳群 1号墳

例 言

1. 本書は、平成13年度・同14年度の2カ年において発掘調査を行った佐久市大字平賀字東久保に所在する東久保遺跡Ⅱ・東久保古墳群1号墳と佐久市大字瀬戸字宮田に所在する宮田遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、佐久市土地開発公社が行う道路改良（宮田線）事業に伴い、佐久市土地開発公社の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。

3. 発掘調査地籍は、以下の通りである。

東久保（ひがしくぼ）遺跡Ⅱ

佐久市大字平賀字東久保2357-2・3274～3277他

東久保（ひがしくぼ）古墳群1号墳

佐久市大字平賀字東久保3398・3399

宮田（みやた）遺跡Ⅱ

佐久市大字瀬戸字宮田2354-55

4. 調査期間は、以下の通りである。

確認調査

平成13年5月9日～5月25日

平成14年9月11日

東久保古墳群1号墳発掘調査

平成13年7月19日～同年10月26日

宮田遺跡Ⅱ発掘調査

平成13年10月31日～同年11月2日

東久保遺跡Ⅱ発掘調査

平成14年9月9日～同年10月29日

報告書作成

平成15年4月7日～平成16年3月31日

5. 発掘調査面積は、以下の通りである。

東久保遺跡Ⅱ 2,860m²

東久保古墳群1号墳 371.3m²

宮田遺跡Ⅱ 86.6m²

6. 発掘調査の組織は、以下の通りである。

発掘調査受託者

佐久市教育委員会

教 育 長 依田 英夫（平成13年6月退任）

高柳 勉（平成13年7月就任）

事務局

教 育 次 長 小林 宏造（平成13年4月退任）

黒沢 俊彦（平成13・14年）

赤羽根寿文（平成15年）

文化財課長 草間 芳行（平成13年）

嶋崎 節夫（平成14・15年）

文化財係長 荻原 一馬（平成13年4月退任）

森角 吉晴（平成13・14年）

高村 博文（平成15年）

文 化 財 係 羽毛田卓也（平成13年）

山本 秀典（平成13・14年）

林 幸彦、須藤 隆司、

小林 眞寿、富沢 一明、

上原 学、出澤 力

（平成13・14・15年）

三石 宗一（平成14・15年）

赤羽根太郎（平成15年）

調査担当

1) 東久保遺跡Ⅱ 須藤 隆司、佐々木宗昭

2) 東久保古墳群1号墳・宮田遺跡Ⅱ 須藤 隆司

調査員

1) 東久保遺跡Ⅱ

浅沼ノブ江、阿部 和人、荒井ふみ子、岩崎 重子、

市川 昭、江原 富子、小幡 弘子、柏木 貞夫、

加藤 美雪、木内 明美、木内 節雄、神津ツネヨ、

小林喜久子、小山 功、桜井 牧子、佐藤志げ子、

佐々木 正、佐々木久子、沢井 皐月、篠崎 清一、

清水佐知子、成沢 富子、花里四之助、花里三佐子、

平林 泰、堀籠 滋子、堀籠みさと、細萱ミスズ、

山浦 豊子、渡辺久美子

2) 東久保古墳群1号墳

市川 昭、柏木 義男、金井 保夫、木内 節雄、

小林 裕、佐藤 剛、田中 章雄

3) 宮田遺跡Ⅱ

市川 昭、金井 保夫、木内 節雄、小林 裕

7. 本書で掲載した地図は建設省国土地理院発行の地

形図（1：50,000）及び佐久市発行の基本図（1：2,500、1：10,000）を使用した。

8. 本書で使用した空中写真は、(株)共同測量社がラジコンヘリで撮影したものである。
9. 国家座標に基づく測量基準杭の設定は有限会社浅間エンジニアリングに依頼した。
10. 遺構図面整理作業と遺物実測作業は浅沼ノブ江、岩崎 重子、小幡弘子、神津ツネヨ、佐藤志げ子、

細萱ミスズが行い、遺構・遺物トレース作業は小幡弘子が行った。

11. 遺構写真は佐々木宗昭と須藤隆司が撮影し、遺物写真は須藤隆司が撮影した。
12. 本書の執筆・編集は須藤隆司が行った。
13. 出土遺物および調査に関する記録類は一括して、佐久市教育委員会文化財課に保管してある。

凡 例

1. 遺構の略称は以下の通りである。

竪穴住居址→H 土坑→D 掘立柱建物址→F
溝状遺構→M

2. 挿図の縮尺

遺構の縮尺は竪穴住居址：1/80、炉・土坑：1/40、古墳跡：1/100である。

遺物の縮尺は土器・砥石：1/4、磨製石斧・勾玉・鉄器：1/2、石鏃・黒曜石剥片：4/5、古銭：原寸である。図中にはスケールを付す。

3. 弥生時代竪穴住居址の区域区分は、主体炉の右側支柱穴をP1、そして反時計回りにP2～P4とし、住居址の長軸と短軸で4区分したそれぞれの区を柱穴名称順に対応してI区～IV区とする。

4. 遺構図面中にある●は遺物の出土位置を示し、その番号は各遺構出土の遺物番号と同一である。

5. 遺構の海拔標高は遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」とした。

6. 遺物写真の番号・縮尺は挿図と同一である。

7. 土層の色調は『新版標準土色帖』に基づいた。

8. 遺構の計測方法

竪穴住居址の長軸長・短軸長・面積は床面の計測値で、面積の計測にはプランメーターを用いた。

土坑・炉・柱穴の長軸長・短軸長・径は上場の計測値である。

9. 表の空欄は不明、推定値には△、遺物現存値には*を付してある。遺構の単位はcm。遺物の単位はmm、gである。また、遺物番号は挿図と同一である。
10. 挿図中におけるスクリーントーン・記号及び色は以下の表現である。

- 1) 遺構

斜線：地山（黄褐色土）、モヤ：焼土、s：礫
第26図東久保古墳群1号墳セクション図におけるスクリーントーンは同図の凡例を参照してもらいたい。また、黒塗りは築造時の構築礫を示し、同形の白抜きは崩落礫を示す。なお、A-BセクションV層における白抜礫は地山の自然礫である。

- 2) 遺物

網目：黒色処理、赤：赤色塗彩。

目次

巻頭カラー図版

例言、凡例、目次、挿図・写真・表目次

I 発掘調査の経緯	1
1 調査に至る経過	1
2 調査日誌	2
II 遺跡の環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	8
III 東久保遺跡Ⅱの調査	10
1 調査の概要	11
2 弥生時代の竪穴住居址とその遺物	11
(1) H4号住居址	11
(2) H5号住居址・(3) H6号住居址・(4) H7号住居址	12
(5) H8号住居址・(6) H9号住居址	13
(7) H10号住居址・(8) H11号住居址・(9) H12号住居址	14
3 土坑	34
(1) D2号土坑・(2) D3号土坑・(3) D4号土坑	34
IV 東久保古墳群1号墳の調査	35
1 調査の概要	35
2 東久保古墳群1号墳の墳丘と石室	36
(1) 現況・(2) 墳形と墳丘・(3) 石室	36
(4) 石室の外部構造・(5) 築造計画	37
3 東久保古墳群1号墳の遺物	47
V 宮田遺跡Ⅱの調査	50
1 調査の概要	50
2 平安時代の竪穴住居址とその遺物	51
(1) H1号住居址	51
(2) H2号住居址	52
VI 調査のまとめ	53
1 東久保遺跡の弥生時代後期集落	53
2 東久保古墳群1号墳と佐久東部山麓「山寄せ古墳」	54

挿 図 目 次

第1図	1 東久保遺跡Ⅱ・2 東久保古墳群1号墳・ 3 宮田遺跡Ⅱの位置 (1:50,000) ……	1
第2図	試掘・発掘調査区 (1:4,000) ……	4
第3図	遺跡の地形 (1:5,000) ……	7
第4図	周辺の古墳群と主要遺跡 (1:20,000) ……	9
第5図	東久保遺跡遺構全体図 (1:400) ……	10
第6図	H4号住居址 ……	15
第7図	H4号住居址の土器と石器 ……	17
第8図	H5号住居址 ……	19
第9図	H5号住居址の土器 ……	20
第10図	H6号住居址 ……	22
第11図	H6号住居址の土器と石器 ……	23
第12図	H7号住居址 ……	25
第13図	H8号住居址 ……	26
第14図	H8号住居址の土器 ……	28
第15図	H9号住居址 ……	29
第16図	H10号住居址 ……	30
第17図	H11号住居址 ……	31
第18図	H12号住居址 ……	32
第19図	H9～12号住居址の土器 ……	33
第20図	D2号土坑 ……	34
第21図	D3号土坑 ……	34
第22図	D4号土坑 ……	34
第23図	東久保古墳群1号墳 (1:100) ……	35
第24図	東久保古墳群1号墳の墳丘と石室 (1:100) ……	38
第25図	東久保古墳群1号墳の根石と基礎地形 (1:100) ……	39
第26図	東久保古墳群1号墳のセクションと 玄室立面 (1:100) ……	40
第27図	東久保古墳群1号墳の鉄器と玉 ……	47
第28図	東久保古墳群1号墳の須恵器 ……	48
第29図	東久保古墳群1号墳の土器 ……	48
第30図	東久保古墳群1号墳の砥石 ……	49
第31図	東久保古墳群1号墳の古銭 ……	49
第32図	宮田遺跡Ⅱ遺構全体図 (1:200) ……	50
第33図	H1号住居址の土器 ……	51
第34図	H1号住居址 ……	51
第35図	H2号住居址 ……	52
第36図	H2号住居址の土器 ……	52

写 真 目 次

写真1	重機でトレンチを掘る ……	2
写真2	東久保古墳群1号墳を掘る ……	2
写真3	1号墳石室の土から遺物を探す ……	2
写真4	宮田遺跡Ⅱを掘る ……	2
写真5	東久保遺跡Ⅱを掘る ……	3
写真6	H4号住居址を掘る ……	3
写真7	野沢中学生、住居址を掘る ……	3
写真8	住居址を測る ……	3
写真9	北部の試掘トレンチ ……	4
写真10	宮田遺跡Ⅱ周辺南部の試掘トレンチ ……	4
写真11	1号墳周辺北部のトレンチ ……	4
写真12	南部の試掘トレンチ ……	4
写真13	佐久東部山地と遺跡の丘陵 ……	5
写真14	遺跡の地形 ……	6
写真15	東久保遺跡と後家山遺跡の弥生時代集落 ……	8
写真16	炉1と北側周溝の遺物 (南から) ……	16
写真17	H4号住居址の炉2 (南から) ……	16
写真18	H4号住居址の炉3 (南から) ……	16
写真19	H4号住居址の炉4 (南から) ……	16
写真20	H4号住居址 (南から) ……	16

写真21	H 4 号住居址の土器と石器……………18	写真54	玄室に詰め込まれた礫 (東西セクション)……………42
写真22	H 5 号住居址の炉(西から)……………19	写真55	玄室に詰め込まれた礫 (南北セクション)……………42
写真23	P 1 周辺の土器(北から)……………19	写真56	西側外護列石と崩落礫(南西から)……………42
写真24	H 5 号住居址(西から)……………19	写真57	盗掘後に整地された玄室床面(南から)……………42
写真25	H 5 号住居址の土器……………21	写真58	東久保古墳群 1 号墳全景(南上空から)……………42
写真26	H 6 号住居址の炉(南から)……………22	写真59	東久保古墳群 1 号墳の石室平面 (上空から)……………43
写真27	H 6 号住居址(南から)、 右下:P 7・9 上面の土器(南から)……………22	写真60	東久保古墳群 1 号墳の石室立面 (南から)……………43
写真28	H 6 号住居址の土器と石器……………24	写真61	西側外護列石と石室立面(南西から)……………44
写真29	H 7 号住居址の炉(南から)……………25	写真62	玄室の礫床(北から)……………44
写真30	H 7 号住居址(南から)……………25	写真63	鏝出土状態(北東から)……………44
写真31	H 8 号住居址(南から)……………26	写真64	刀子出土状態(南西から)……………44
写真32	H 8 号住居址の炉 1(南から)……………27	写真65	東側壁石と裏込め石(南西から)……………44
写真33	H 8 号住居址の炉 2(東から)……………27	写真66	西側壁石(東から)……………44
写真34	P 5 内に廃棄された高坏(南から)……………27	写真67	羨道部根石(南から)……………44
写真35	西壁際に廃棄された甕(南東から)……………27	写真68	羨道部根石(北から)……………44
写真36	H 8 号住居址Ⅲ区に廃棄された遺物 (西から)……………27	写真69	奥壁裏込め石(北から)……………45
写真37	H 8 号住居址の土器……………28	写真70	奥壁裏込めセクション(西から)……………45
写真38	H 9 号住居址の炉(西から)……………29	写真71	玄室東側壁裏込め石と盛土(北から)……………45
写真39	H 9 号住居址(西から)……………29	写真72	玄室東側壁裏込め石と盛土(南から)……………45
写真40	H 10 号住居址の炉(西から)……………30	写真73	内回りの外護列石(北上空から)……………45
写真41	H 10 号住居址(西から)……………30	写真74	根石立面(東から)……………46
写真42	H 11 号住居址の炉(南東から)……………31	写真75	根石立面(西から)……………46
写真43	H 11 号住居址(西から)……………31	写真76	根石立面(北から)……………46
写真44	H 12 号住居址(西から)……………32	写真77	外護列石と盛土(北から)……………46
写真45	H 9～12 号住居址の土器……………33	写真78	基礎地形(南西から)……………46
写真46	D 2 号土坑(南から)……………34	写真79	東久保古墳群 1 号墳の鉄器と玉……………47
写真47	D 3 号土坑(南から)……………34	写真80	東久保古墳群 1 号墳の土器……………48
写真48	D 4 号土坑(南から)……………34	写真81	東久保古墳群 1 号墳の砥石……………49
写真49	東久保古墳群 1 号墳の立地 (南上空から)……………41	写真82	東久保古墳群 1 号墳の古銭……………49
写真50	盗掘後に埋め戻された石室 (南西から)……………41	写真83	宮田遺跡Ⅱの地形(西から)……………50
写真51	周溝 E-F セクションと崩落礫 (北西から)……………41	写真84	宮田遺跡Ⅱの遺構(西から)……………50
写真52	周溝 C-D セクションと崩落礫 (南東から)……………41	写真85	H 1 号住居址の土器……………51
写真53	西斜面 C-D セクションと崩落礫 (南東から)……………41	写真86	H 1 号住居址(西から)……………51
		写真87	H 2 号住居址の土器……………52
		写真88	H 2 号住居址(西から)……………52

表 目 次

表 1	住居址計測表	14	表 7	H 8 号住居址土器一覽表	28
表 2	H 4 号住居址土器一覽表	18	表 8	H 9 ~12号住居址土器一覽表	33
表 3	H 4 号住居址石器一覽表	18	表 9	東久保古墳群 1 号墳鉄器・玉一覽表	47
表 4	H 5 号住居址土器一覽表	21	表10	東久保古墳群 1 号墳土器一覽表	48
表 5	H 6 号住居址土器一覽表	23	表11	東久保古墳群 1 号墳砥石・古錢一覽表	49
表 6	H 6 号住居址石器一覽表	23			

I 発掘調査の経緯

1 調査に至る経過

東久保遺跡Ⅱと東久保古墳群1号墳は佐久市平賀地籍に、宮田遺跡Ⅱは佐久市瀬戸地籍に所在する。これらの遺跡は佐久東部山地が佐久盆地に最も突出した山地西端部に位置する。

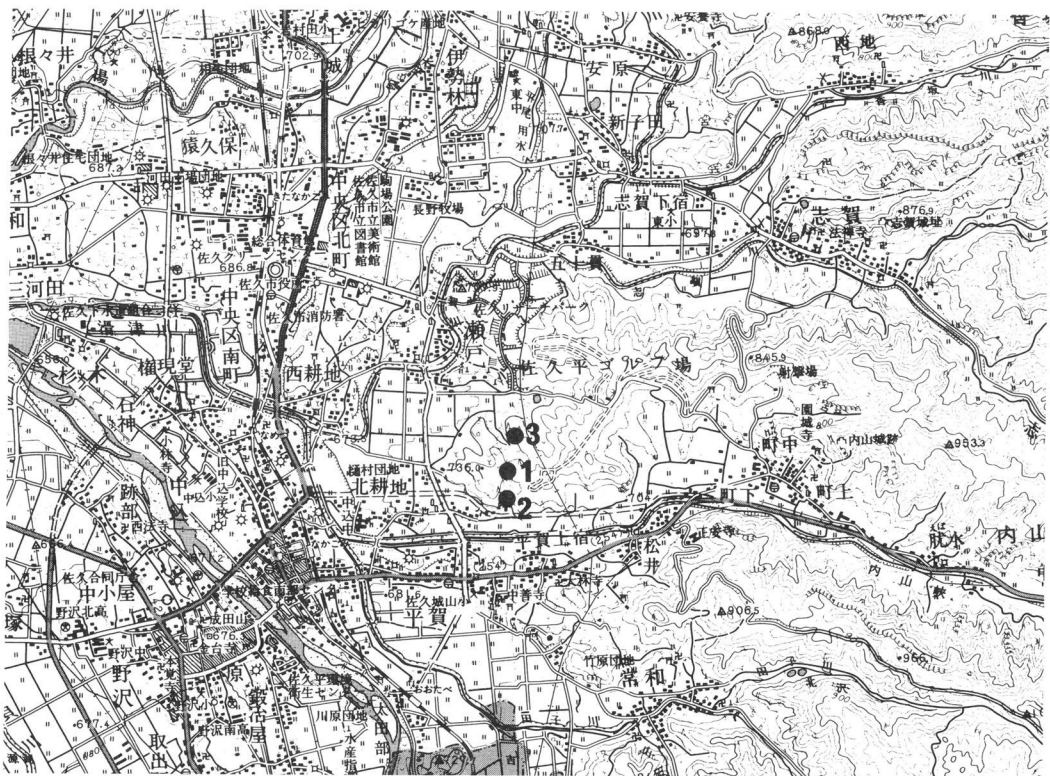
東久保遺跡Ⅱは尾根頂部の平坦面に立地し、表面採集の遺物から弥生時代の遺跡として知られていた。また、平成14年度の佐久総合運動公園整備事業に伴う発掘調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡3軒が検出されている（東久保遺跡Ⅰ）。

東久保古墳群は南斜面部に築造された5基の円墳（1～5号墳）からなると想定された古墳群である。その中で、1号墳は平地に接する谷中斜面に存在し、過去の盗掘及び畑の造成により墳丘は削られていたが、天井石が取り除かれた石室が露出しており、東久保古墳群において最大規模で明確な古墳であることが確認

されていた。

宮田遺跡は丘陵西側の浅い谷部と低地に接する緩斜面で確認されていた遺跡で、前述の佐久総合運動公園整備事業に伴う発掘調査では、中世の小規模な村落と谷間の畑跡が検出されている（宮田遺跡Ⅰ）。

今回、佐久市土地開発公社により佐久総合運動公園整備事業に伴う道路改良（宮田線）が計画されたため、平成13年度から開発対象地内の遺跡確認調査を実施した。その結果、すでに周知であった東久保古墳群1号墳、隣接地である東久保遺跡Ⅰの調査から集落の存在が確定的となった東久保遺跡Ⅱ、確認調査で新たに発見された宮田遺跡Ⅱは、路線変更が不可能な場所に存在していたため記録保存の必要性が生じ、佐久市土地開発公社より委託を受けた佐久市教育委員会がこれらの遺跡における発掘調査を行う運びとなった。



第1図 1 東久保遺跡Ⅱ・2 東久保古墳群1号墳・3 宮田遺跡Ⅱの位置（1：50,000）

2 調査日誌

(1) 確認調査

平成13年5月9日～5月11日 (写真10)

大字瀬戸字宮田地籍の丘陵西緩斜面と谷部に重機によるトレンチ23本を設定して、遺構・遺物の確認調査を行う。谷部では遺構・遺物は検出されなかったが、緩斜面の一部で平安時代の住居址2軒が検出され、その地点を宮田遺跡Ⅱと呼称する。

同年5月21日 (写真9)

路線北部、大字瀬戸字池下地籍の低地部に重機によるトレンチ5本を設定して、遺構・遺物の確認調査を実施する。結果は遺構・遺物とも存在しなかった。

同年5月22日・25日 (写真11)

大字平賀字東久保地籍の東久保遺跡から東久保古墳群1号墳の間にある丘陵斜面部・谷部に重機によるトレンチ11本を設定して、遺構・遺物の確認調査を実施する。結果は遺構・遺物とも存在しなかった。

平成14年9月11日 (写真12)

路線南部、東久保古墳群1号墳の南斜面部に重機によるトレンチ4本を設定して、遺構・遺物の確認調査を実施する。結果は遺構・遺物とも存在しなかった。



写真1 重機でトレンチを掘る



写真2 東久保古墳群1号墳を掘る

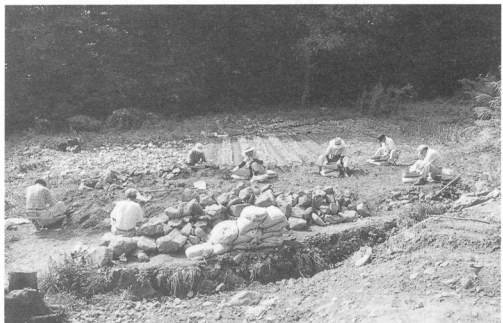


写真3 1号墳石室の土から遺物を探す



写真4 宮田遺跡Ⅱを掘る

(2) 東久保古墳群1号墳の調査

平成13年7月19日

石室・墳丘部、草・表土除去清掃。

同年7月24日～8月10日

東西トレンチ設定、表土掘り下げ。周溝・墳丘盛土確認作業。

同年8月20日～9月17日

周溝・墳丘調査。石室内調査、遺物検出作業。

同年9月20日・21日

(株)共同測量社がラジコンヘリを用いた墳丘・石室の空中写真撮影を実施する。石室内の土壌を選別し遺物回収作業を行う。

同年9月25日～10月16日

石室裏込め・外護列石礫等構築部・盛土調査。

同年10月22日

(株)共同測量社がラジコンヘリを用いた内回りの外護

列石等の空中写真撮影を実施する。石室内の土壌を選別し遺物回収作業を行う。

同年10月23日～25日

石室・外護列石構築以前の整地状況調査。

同年10月26日

古墳構築前の自然地形・堆積状況調査。廃土処理を行い現場作業終了。

(3) 宮田遺跡Ⅱの調査

平成13年10月31日～11月2日

遺構検出作業を行う。H1号・H2号住居址の掘り下げ・実測作業を行う。2日に現場調査終了。

(4) 東久保遺跡Ⅱの調査

平成14年9月9日～9月11日

重機によるトレンチで遺構確認作業を行う。竪穴住居址9軒の広がり予想される。

同年9月12日～9月24日

トレンチで確認した遺構検出範囲の表土を重機により除去する。遺構プランの確認作業を実施する。弥生時代後期の竪穴住居址9軒と土坑3基が確認される。

同年10月3日～10月17日

H4号～12号住居址とD2号～4号土坑の掘り下げ・実測・写真撮影作業を行う。

同年10月18日

佐久市野沢中学校2年生10人が職場体験学習として竪穴住居址の発掘調査を体験する。

同年10月19日～10月24日

遺構の調査を終了する。

同年10月29日

(株)共同測量社がラジコンヘリを用いた遺構全体及び地形の空中写真撮影を実施する。現場調査を終了する。

(5) 報告書作成作業

平成15年4月7日～平成16年3月31日

東久保遺跡Ⅱ・東久保古墳群1号墳・宮田遺跡Ⅱにおける各種遺物の水洗・注記・復元・実測・トレース・写真撮影作業、各種遺構の図面修正・トレース・写真割付作業、原稿執筆、編集作業を実施する。報告書は平成16年3月31日に刊行する。

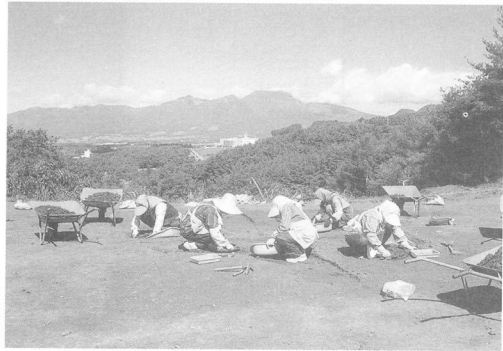


写真5 東久保遺跡Ⅱを掘る



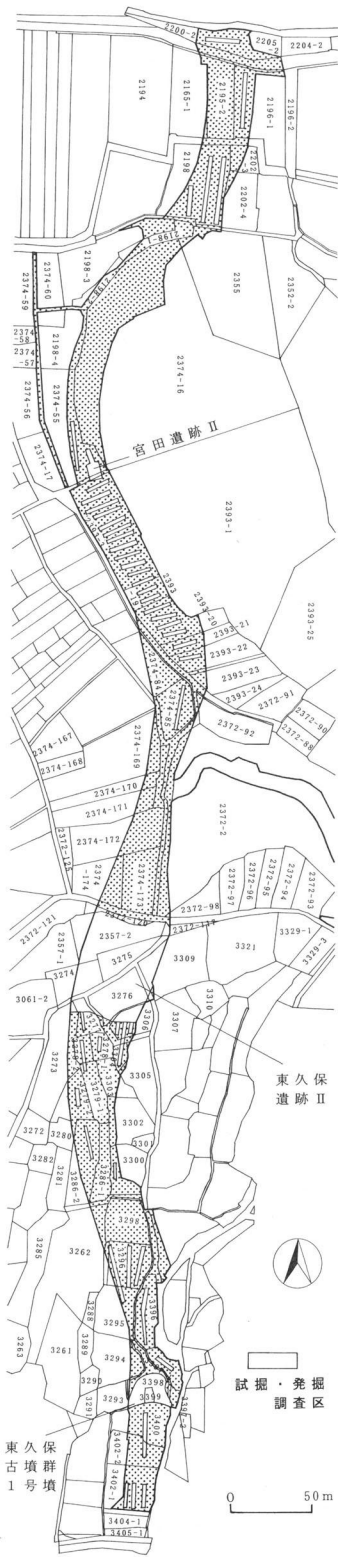
写真6 H4号住居址を掘る



写真7 野沢中学生、住居址を掘る



写真8 住居址を測る



第2図 試掘・発掘調査区 (1:4,000)



写真9 北部の試掘トレンチ



写真10 宮田遺跡II周辺南部の試掘トレンチ



写真11 1号墳周辺北部のトレンチ



写真12 南部の試掘トレンチ

Ⅱ 遺跡の環境

1 地理的環境

秩父多摩国立公園が長野県界を越えて佐久地方に入り込む関東山脈の最西北端部と妙義・荒船佐久高原国定公園の接点にあたる群馬・長野両県境分水嶺をなしている山地を総称して佐久山地と呼ぶ。佐久市内におけるこの山地の主峰は荒船山(1422.5m)で、この外に兜岩山(1368m)・物見山(1375m)・八風山(1315m)などが県境に連なる。これらの山並みの間から流れ出す滑津川・志賀川・香坂川は緩やかに西流して、佐久平で千曲川に合流する。佐久平は千曲川の上流沿岸平地で標高700m付近を測る。荒船山は第三紀の古い火山で解析が極端に進み山頂が平らな老年期の地形をなし、佐久平に向かって数条の尾根状支脈をのばしている。滑津川両岸においても火山噴出物溶岩からなる

尾根が佐久平東縁まで達して入る。その支脈である滑津川北側尾根の西末端部に東久保遺跡Ⅱ・東久保古墳群1号墳・宮田遺跡Ⅱは位置している。(白倉盛男1988「第二章 第1節 長峯古墳群付近の自然環境」『長峯古墳群』佐久市教育委員会 改変)

東久保遺跡Ⅱは尾根頂部の平坦面に立地する。標高は730m前後である。北側はやや急な谷頭であり、南側は緩傾斜面から東久保古墳群1号墳の存在する谷へと繋がる。弥生時代後期の竪穴住居址が展開するのは標高731.5~730.5mの平坦面と標高730~729mの南側緩斜面である。平坦面はほぼ調査を終了しているが、南側の緩斜面は東側に広がりを見せており、竪穴住居址の存在、集落の広がりが見測される。



写真13 佐久東部山地と遺跡の丘陵

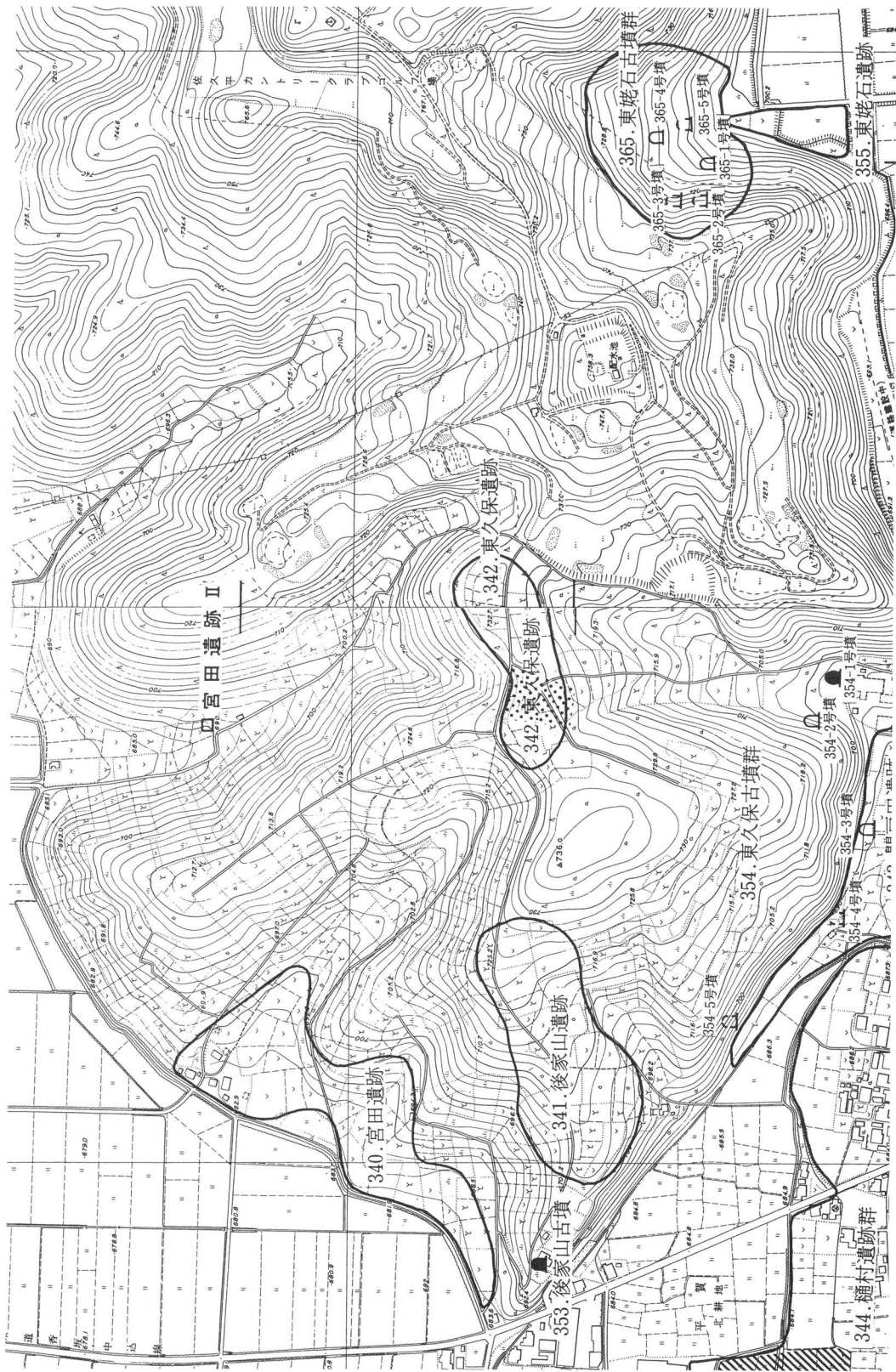
宮田遺跡Ⅱは今回の確認調査で新たに確認された遺跡である。北側に延びる尾根斜面が谷部の平坦面に接する緩斜面端部に立地する。標高は692m程である。平安時代の竪穴住居址2軒の確認であり、谷部・隣接する緩斜面では遺跡の広がりには確認されていない。

東久保古墳群1号墳は前述したように東久保遺跡Ⅱの南側谷中斜面に立地する。その場所は平地に接する位置にある。標高は697m前後である。

東久保遺跡Ⅱ・宮田遺跡Ⅱの地層は、基本的に丘陵の基盤を形成した火山噴出物溶岩（溶結凝灰岩）が風化した粘性の強い土壌の堆積からなる。両遺跡では耕作土下が所謂地山と称される小礫混じりの黄褐色土であり、東久保遺跡Ⅱでは一部岩盤と称せる箇所が露出していた。東久保古墳群1号墳は谷中に立地するため、地山（黄褐色土）の上部に水性堆積を要因とする黒褐色土の堆積が存在していた。



写真14 遺跡の地形



第3図 遺跡の地形 (1 : 5,000)

2 歴史的環境

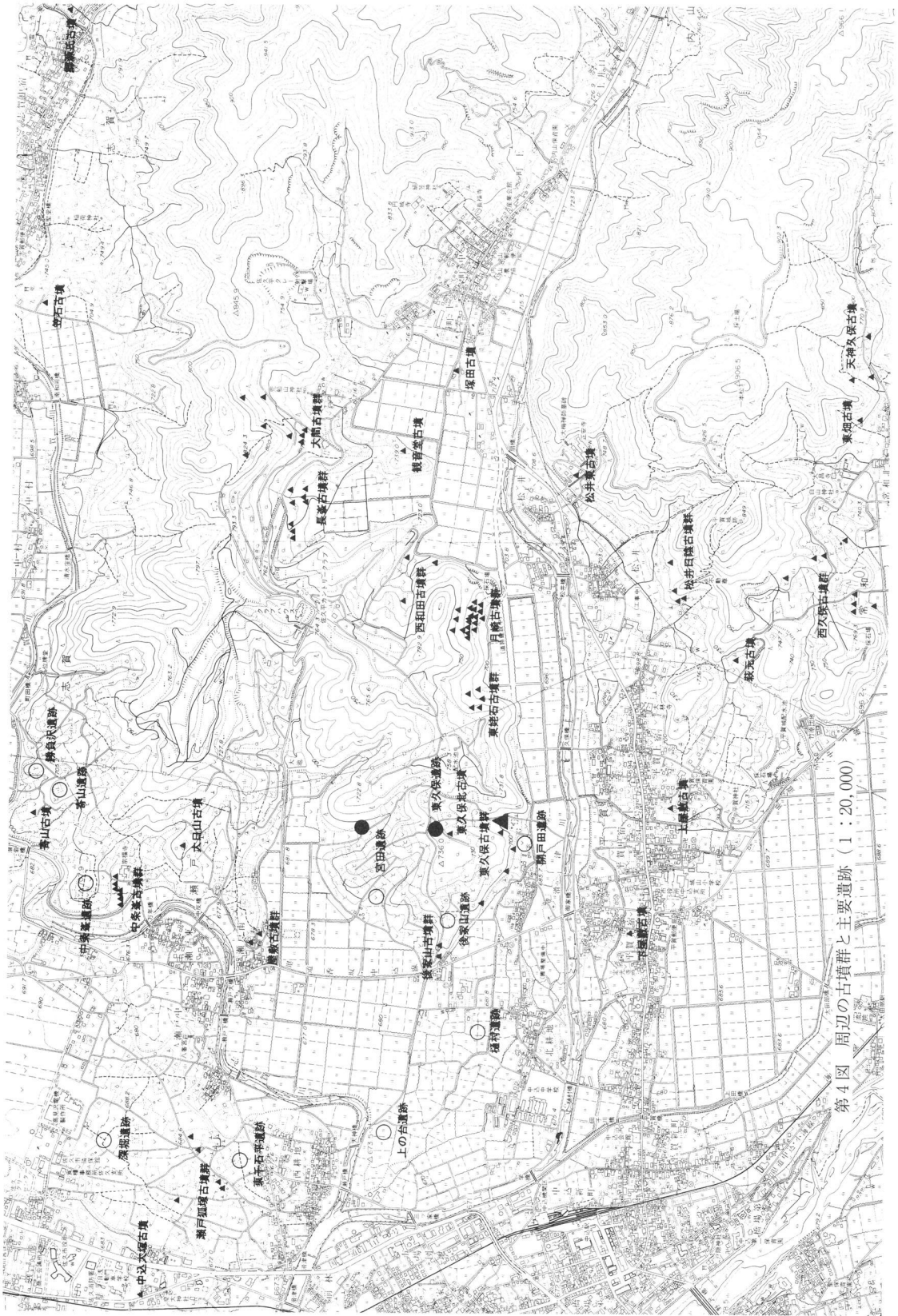
佐久東部山地の尾根状支脈東端の遺跡群を中心に周辺の遺跡・古墳群を概観しよう。

佐久市における旧石器時代の遺跡は浅間山の降下火山灰の堆積が存在する香坂・志賀地籍、八ヶ岳の降下火山灰の堆積が存在する前山地籍等で発見されているが、そうした火山灰の堆積が見られない本地域では旧石器時代遺跡のあり方が不明である。そうした中において後家山遺跡では弥生時代後期の土坑墓から黒曜石製のナイフ形石器、宮田遺跡Ⅰの低地部から同じく黒曜石製のナイフ形石器が検出され、遺跡存在の可能性が確認された。縄文時代の遺跡では宮田遺跡Ⅰで草創期と考えられる有茎尖頭器が得られている。また、佐久リサーチパーク建設に伴う平成元年から平成6年の発掘調査で、中条峯遺跡で前期の住居址2軒、寄山遺跡で中期の住居址115軒、勝負沢遺跡で中期の住居址37軒が検出され、旧志賀湖の湖畔に営まれた縄文集落の様相が明らかにされている。弥生時代では東久保遺跡隣接地の丘陵尾根にある後家山遺跡で環濠に囲まれた

中期の集落、68軒の住居址からなる後期の集落が平成13・14年度の発掘調査で確認されている。古墳時代では昭和57・58年度に調査された樋村遺跡で200軒以上の堅穴住居址からなる滑津川氾濫源の自然堤防に営まれた後期集落跡が確認されている。古墳群では昭和49年度に調査された6～7世紀築造の後家山1号墳、平成13年度に調査された5世紀後半～6世紀前半の築造と考えられる後家山2号墳、平成14年度に調査された8世紀に築造された東久保北古墳が隣接地に存在する。また、東姥石古墳群、月崎古墳群、西和田古墳群、長峯古墳群、大間古墳群などの円墳から構成される数多くの古墳群が東部山地の丘陵尾根斜面部に存在する。これらの築造背景には、石室構築材としての溶結凝灰岩の存在が大きい。長峯古墳群では古くは明治22年に調査が行われた記録があり、昭和62年度には7世紀末～8世紀初頭に築造された円墳5基が調査されている。また、大間古墳群でも明治22年に大間塚が調査された記録がある。

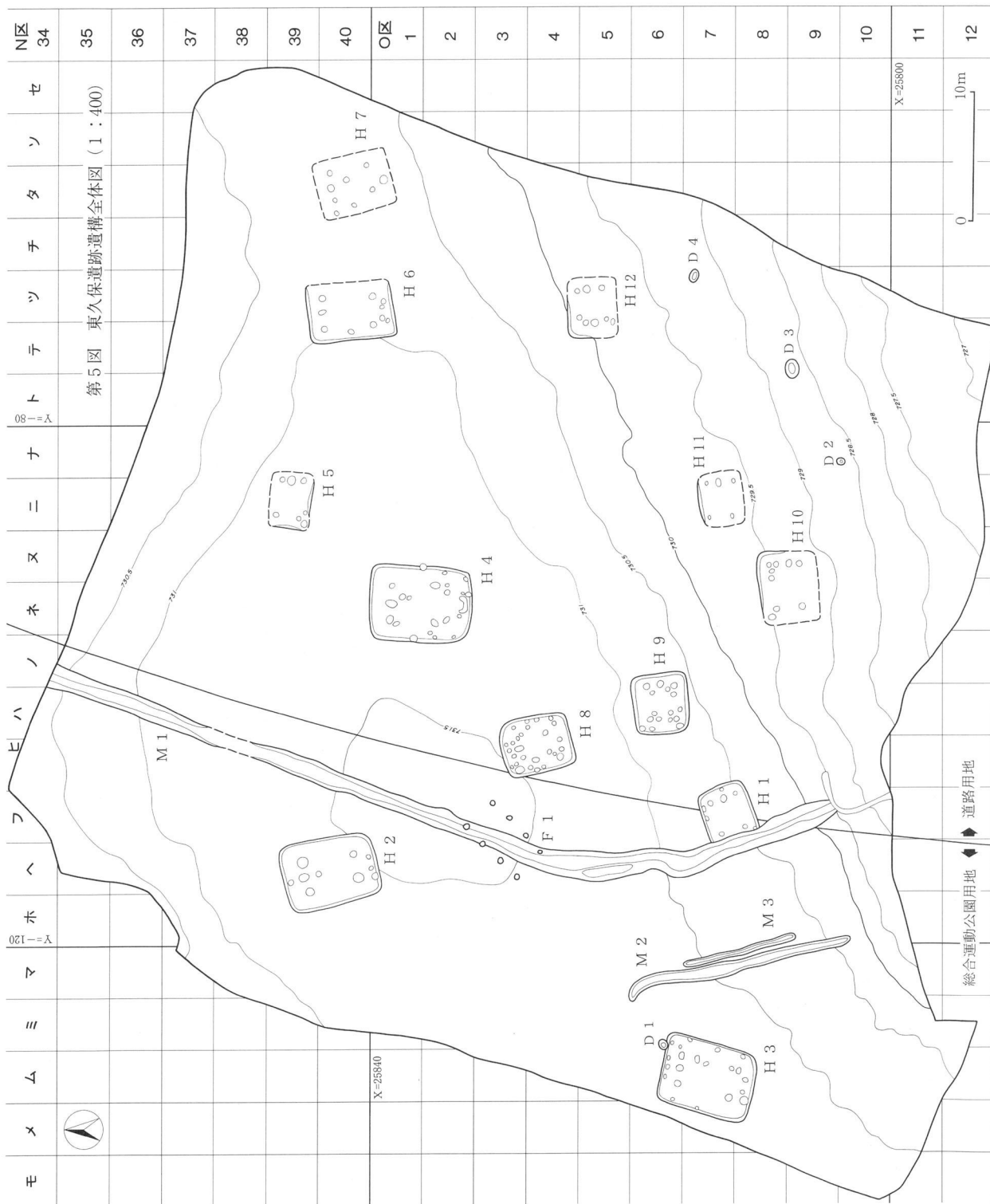


写真15 東久保遺跡と後家山遺跡の弥生時代集落



第4図 周辺の古墳群と主要道路 (1 : 20,000)

Ⅲ 東久保遺跡Ⅱの調査



1 調査の概要

遺跡名	東久保（ひがしくぼ）遺跡Ⅱ 略称 H H K	検出遺構	弥生時代後期竪穴住居址 9軒
所在地	長野県佐久市大字平賀字東久保2357-2他		土坑 3基
発掘調査期間	平成14年9月9日～同年10月29日	出土遺物	弥生後期土器：壺・甕・鉢・甑・高坏
発掘調査面積	2,860m ²		石器：石鏃・磨製石斧・黒曜石剥片

東久保遺跡は前述したように、佐久総合運動公園整備事業とそれに伴う道路改良事業によって平成14年度に調査された。開発主体者が異なるために前者を東久保遺跡Ⅰ、後者を東久保遺跡Ⅱと呼称したが、連続する尾根頂部平坦面の調査であることから、遺構番号は連番とした。東久保遺跡Ⅰの範囲では竪穴住居址3軒（H1～3）、掘立柱建物址1棟（F1）、土坑1基（D1）、溝状遺構3本（M1～3）が検出されている。したがって、本報告ではH4～12の竪穴住居址9軒と

D2～4の土坑3基に関する記述を行う。

また、グリッド設定も後家山遺跡・東久保遺跡Ⅰの調査に準じた。本調査区は40m四方の区画であるN区とO区に相当し、4m四方のグリッドは東西がセ～モ、南北がN区で34～40、O区で1～11の範囲にある。グリッドの名称は例えばNニ39となる。

なお、本地域の土壌は粘性が強いために、検出された土器は著しく風化しており、表面の文様や赤色塗彩が剥落した資料が大半であった。

2 弥生時代の竪穴住居址とその遺物

(1) H4号住居址（第6・7図 写真16～21）

Oネ1・2グリッドに位置し、標高731m程の平坦面に立地する。長軸長750cm・短軸長560cm・面積39.2m²の長方形プランを呈する。長軸方位は南北方向にありN-3°-Eである。床面・壁は地山の黄褐色土からなり、壁残高は25cmである。北壁と西壁北半に幅10cm・深さ15cmの周溝が存在する。

柱穴は16カ所が確認された。整然と配置されたP1～4が主柱穴と考えられる。径35～55cm、深さ35cm前後でP4のみ深さ55cmと深い。径50cm・深さ35cmのP5は小規模であるが土坑状をなす。南壁中央部に接して凹字状の深さ10cm程の掘り込み部が存在する。出入り口部施設と考えられ、両脇にある径16cm・深さ10cm程のP8・9も付随するものであろう。径30cm・深さ14cm前後のP10・11は東西の壁中央部に存在する。径30cm・深さ18cmのP6はP2の西南側に、径25cm・深さ14cmのP7はP4の東側に接する位置にある。径15cm・深さ15cm程のP12～14は西壁南半に、径15cm・深さ10cm程のP15・16は東壁南半に接する位置にある。

炉址は4カ所で確認された。炉1はP1・P2間の

中央部に位置する主体炉である。70cm×58cmの楕円形を呈し長軸方向は住居址と同じく南北方向にある。深さ15cm程の掘り込みが確認された。炉2は炉1の東南側に50cm程の隙間を空けて存在する。長軸を南北方向に設けた52×42cmの楕円形を呈し、南側に径30cm程の掘り込みを付属する。炉3はP4の北東側に50cm程の隙間を空けて存在する。49cm×35cmの楕円形を呈し、長軸方位は南北方向にある。炉4はP3の北西側に40cm程の隙間を空けて存在する。55cm×37cmの楕円形を呈する。長軸方位は同じく南北方向にあるがやや東よりである。

検出遺物には弥生時代後期箱清水式の鉢・高坏・甑・壺、石鏃がある。出土状態は破片の集中的な廃棄が北壁周溝及びその周辺に見られた。第7図1は小形の鉢で内外面共に赤色塗彩が施されている。ほぼ完形の状態で検出された唯一の土器で北壁周溝中央部に廃棄されていた。3・4は赤色塗彩された高坏である。3は大形の高坏で坏部が本住居址のI区に、脚部がH8号住居址のP5に廃棄されていた。内外面赤色塗彩されており、口縁部につけられた突起が2カ所に残る。

5は単孔の甑である。北壁周溝付近の検出である。6～14が甕で、7・8・11に櫛描波状文と櫛描簾状文、9に櫛描簾状文、10に櫛描波状文が施されている。8・11が北壁周溝に廃棄されていた。15・16は壺である。15は胴下位にくびれを有し赤色塗彩されたもので、P5内に廃棄されていた。17・18は黒曜石製の石鏃である。17はI区2層から、18はP6内から検出され、共伴の可能性が検討できる。

(2) H5号住居址 (第8・9図 写真22～25)

Nニ39グリッドに位置し、標高731m程の平坦面北部に位置する。耕作及び土取りによって破壊されており、壁は西壁と南壁の一部が高さ6cm程度に確認されたのに止まる。検出面・床は地山の黄褐色土である。残存部からおおよその規模を推定すると、長軸方位は東西方向で、長軸長420cm、短軸長300cm、面積13m²程度の矩形を呈する小形住居址である。支柱穴はP1～P4の4本で、径30～40cm・深さ20cm程である。南西隅にあるP5は径50cm・深さ15cmで小土坑状を呈する。P6は径25cm・深さ10cmでP4の北側、南壁よりに位置する。炉址は東側の支柱穴P1・P2の中間で確認されている。長軸方位は東西方向で、62cm×45cmの楕円形を呈する。

検出遺物には、弥生時代後期箱清水式の鉢・高坏・甑・甕・壺がある。P1南側に破片の状態で集中的に廃棄された箇所が存在していた。第9図1～3は内外面とも赤色塗彩が施された鉢である。4～6が高坏と考えられ、内外面に赤色塗彩が見られる5はP3覆土上面の検出である。8は残存部1/4程度の単孔甑でP2内から検出された。9～16が甕と考えられる資料である。9の櫛描波状文・簾状文が施された小形甕は破片でⅢ区から出土。同じく櫛描波状文・簾状文のある10・16の甕はP1南側の集中部に廃棄されていたもので、16は残存部1/2程度に復元されている。17～20は壺で17・18の大形壺口縁部は内外面とも赤色塗彩が施され、頸部に篋描矢羽根状文のある17はⅢ区とⅣ区に、頸部に櫛描T字文のある18はP1南側の集中部に廃棄されたものである。19・20は外面赤色塗彩された胴部破片で、篋描簾状文・篋描T字文のある19はⅢ区、篋描波状文のある20はP1南側集中部の検出である。

(3) H6号住居址 (第10・11図 写真26～28)

Nツ・テ40グリッドに位置し、標高731m程の平坦面に位置する。耕作によって削平され、東壁は残存しない。北・西・南壁が5～7cm程度に残存していた。壁・床面は地山の黄褐色土である。長軸方位は南北方向で、長軸長628cm、推定短軸長430cm、推定面積28m²程度の長方形を呈する住居址である。整然と配置されたP1～P4が支柱穴であろう。径45cm・深さ55～66cm程の大きさである。径40cm・深さ15cm程のP5は西壁中央部に接する位置にある。P6～9は南壁中央に接する位置にあり、出入り口施設関連であろう。径ではP6・9が40cm、P7・8が25cm、深さではP6・7が45cm、P8・9が20cmである。

炉址は支柱穴P1・P2の中間で確認されている。長軸方位は南北方向で、60cm×40cmの楕円形を呈する。15cmの掘り込みがあり、南端に長さ28cm・幅8cmの棒状安山岩が炉縁石として横位に据えられていた。焼土範囲は縁石前方径30cm・厚さ6cm程である。

検出遺物には弥生後期箱清水式の鉢・高坏・甑・壺と磨製石斧・黒曜石剥片がある。遺物の集中的な廃棄はP7・P9の覆土に見られた。第11図1・2が鉢で、1がⅣ区・2がP9上面で検出されている。3は高坏脚部破片でP9内から出土。4の単孔甑底部破片はP4の脇から検出。5は頸部に篋描矢羽根状文がある大形壺口縁部破片でⅣ区出土。6は頸部に篋描矢羽根状文、外面と内面口縁部に赤色塗彩がある大形壺でP7覆土から出土している。7は黒曜石製の剥片で端部に連続する微細剥離痕が観察される。P4の底部付近から検出された。8は黒色を帯びる安山岩の扁平棒状礫を用いた、刃部のみ研磨された磨製石斧である。研磨の範囲は表裏面において刃部縁辺から5mm程である。P9内から出土。

(4) H7号住居址 (第12図 写真29・30)

Nタ40グリッドに位置し、標高731m程の平坦面東部に位置する。耕作によって削平され、壁は残存しない。検出面は地山の黄褐色土で、炉・ピットのみを確認だが、炉・支柱穴の配置から長軸方位が南北方向にある長方形の住居址であったことが知れる。支柱穴は整然と配置されたP1～P4と考えられ、径30cm・深さ

50cm程（P4の深さは70cm）の大きさである。P5は南壁中央に接する位置にあったと推定され、出入り口施設関連とも考えられるが、径50cm・深さ64cmと大きく、貯蔵穴的である。炉址は北側の支柱穴P1・P2の中間で炉1、その南側住居中央より100cmの位置に炉2が確認されている。炉1は南北方向に主軸をなす45cm×34cm・厚さ8cmの楕円形を呈する焼土面の確認であり、炉2は径28cm・厚さ8cmの焼土面のみの確認である。検出遺物は柱穴から弥生土器片数片が得られたのみである。

(5) H8号住居址（第13・14図 写真31～37）

Oハ・ヒ3・4グリッドに位置し、標高731m程の平坦面はほぼ中央に立地する。長軸方位は南北方向にあり、長軸長510cm・短軸長410cm・面積19.6㎡の方形プランを呈する。検出面・床面・壁は地山の黄褐色土からなる。壁残高は34cmである。

柱穴の確認は25カ所に及んだ。整然と配置されたP1～4が支柱穴と考えられる。径25cm程・深さ35～56cmの大きさである。南西隅にある45cm×40cm・深さ25cmのP5は小規模であるが土坑状を呈し、後述するように高坏脚部が集中的に廃棄されていた。北西隅にある60cm×50cm・深さ16cmのP6も皿状を呈する形態である。南壁中央部やや西側に接して存在するP9とP10が出入り口部施設関連であろうか。長軸方向が南北方向にあり30×15cm・深さ10cmの小判形を呈する。径25cm・深さ10cmのP7、35×20cm・深さ11cmのP8は東西の壁中央部に存在する。径25cm・深さ36cmのP11は北壁中央に接する。径15～25cm・深さ10～22cmのP12～P17は、支柱穴P1・P2ラインより北壁側に集中する柱穴群である。径15cm・深さ48cmのP18はP1に付随する位置にある。径15cm・深さ13・20cmのP22・23は東壁南半に接し、その内側に径15cm・深さ20・30cmのP20・P24がある。径15cm・深さ14・20cmのP19・P21は西壁に接しP8の両脇にある。そして、径20cm・深さ14cmのP25はP3とP5の間に位置する。

炉址は2カ所で確認された。炉1は支柱穴P1・P2間の中央部に位置する主体炉である。長軸方向は住居址と同じく南北方向にあり、75cm×58cmの楕円形を呈し深さ15cm程の掘り込みが確認された。焼土面は70

cm×40cm、厚さ5cm程であった。炉2は支柱穴P2・P3の中央西側、P7・P8の東西中央ラインに位置する。長軸方向は東西にあり、58×44cmの楕円形を呈し15cm程の掘り込みを有する。焼土面は55cm×40cm、厚さ4cm程である。

検出遺物には弥生時代後期箱清水式土器の鉢・高坏・甕・壺がある。前述したように西南隅にあるP5内に脚部3個体と鉢口縁部破片1個体が集中的に廃棄されていた。また、高坏脚部の1個体はH4号住居址に廃棄された坏部と接合している（第7図3）。第14図1はP5内に廃棄された鉢？口縁部破片である。2は内外面赤色塗彩された高坏坏部で口縁に2カ所の突起を有する。4～5がP5内に一括廃棄された脚部で、5は内面が剥落しているが、4と共に内外面赤色塗彩されたものであろう。6は西壁中央脇に半完形で廃棄されていた甕で、表面の剥落が激しいが頸部に櫛描簾状文があり、胴部で櫛描波状文が僅かに観察できた。7～9は甕底部破片である。10は外面に赤色塗彩が施され、胴下位にびれを有する壺破片である。

(6) H9号住居址（第15・19図 写真38・39・45）

Oハ6グリッドに位置し、標高730.5m程の平坦面からやや緩斜面に及ぶ箇所に立地する。長軸方位は東西にありN-84°-Eである。長軸長430cm・短軸長364cm・面積15.4㎡の矩形プランを呈する。検出面・床面・壁は地山の黄褐色土からなる。壁高は斜面上部である北壁で残りが良好で50cmを測る。北壁から西壁隅に幅6cm・深さ6cm程の周溝が存在する。

柱穴は15カ所が確認されている。整然と配置されたP1～4が支柱穴と考えられる。径40～50cm・深さ32～45cmの大きさである。南西隅にある50cm×45cm・深さ40cmのP5は小土坑（バケツ）状を呈し、貯蔵穴様である。P8～P11は支柱穴の内側に巡るもので、径20～30cm・深さ14～38cmである。支柱穴P3・P4間にあるP12・P13はやや内側であるが、出入り口部施設関連であろうか。径25cm・深さ35～40cmである。P6・P7はラインはずれるが支柱穴P1・P4の間にあり、P6が径30cm、P7が35cm×20cmで深さは共に12cmである。P14・P15は西壁隅の周溝内にあり、P14が径15cm・深さ24cm、P15が径25cm・深さ11cmである。

炉址は支柱穴P1・P2間の中央部に位置する。長軸方向は東西にあり、40cm×32cm・厚さ7cmの楕円形を呈する焼土範囲として確認された。

遺構の残りは良好であったが遺棄された遺物はなく、廃棄された遺物も少なかった。第19図1・2に示した資料は弥生時代後期箱清水式土器の壺頸部破片で外面赤色塗彩されている。1には櫛描横線文・簾状文、2には櫛描T字文が見られる。

(7) H10号住居址 (第16・19図 写真40・41・45)

Oヌ・ネ8・9グリッドに位置し、標高729.5m程の南緩斜面に立地する。検出面は地山の黄褐色土であるが、耕作によつて大半が削平されており、検出箇所は北壁と東壁の一部、炉、柱穴7カ所である。残存部から推定すると主軸方位は東西にあり、長軸長540cm・短軸長450cm程度であろう。柱穴はP1～P4が支柱穴と考えられ、径30～40cm・深さ26～28cmの大きさである。P2の北側にP4・P6・P7があり径25～40cm・深さ18～22cmである。径35cm・深さ24cmのP5はP3に付随する。炉址は支柱穴P1・P2間の中央部に位置する。長軸方向は東西にあり、45cm×40cm・厚さ7cmの楕円形を呈する焼土範囲として確認された。長さ10cm・幅5cmの長方形安山岩礫が西側にあり、炉縁石の残存と思われる。

遺物はほとんど残されていなかったが、第19図3の内外面共に赤色塗彩された大形壺頸部破片が検出されている。

(8) H11号住居址 (第17・19図 写真42・43・45)

Oニ7グリッドに位置し、標高729.7m程の南緩斜面に立地する。黄褐色土を検出面とするが、耕作によつ

て床面の大半まで削平され、北壁の一部と炉、柱穴4カ所の確認に止まった。残存部から推定すると主軸方位は東西にあり、少なくとも長軸長420cm・短軸長300cm程の規模を有したと思われる。柱穴は支柱穴と考えられるP1～P4が確認された。径20～30cm・深さ20cm程の大きさである。炉址は支柱穴P1・P2間の中央部に位置する。長軸方向は東西にあり、42cm×34cm・厚さ6cmの楕円形を呈する焼土範囲として確認された。検出遺物は少なく、図示できるものは第19図4の内外面共に赤色塗彩された高坏脚部破片である。

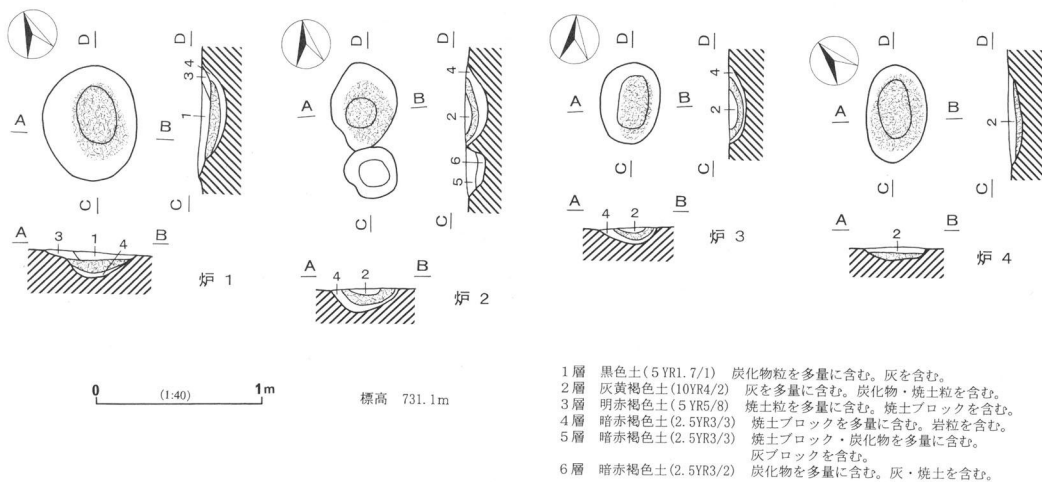
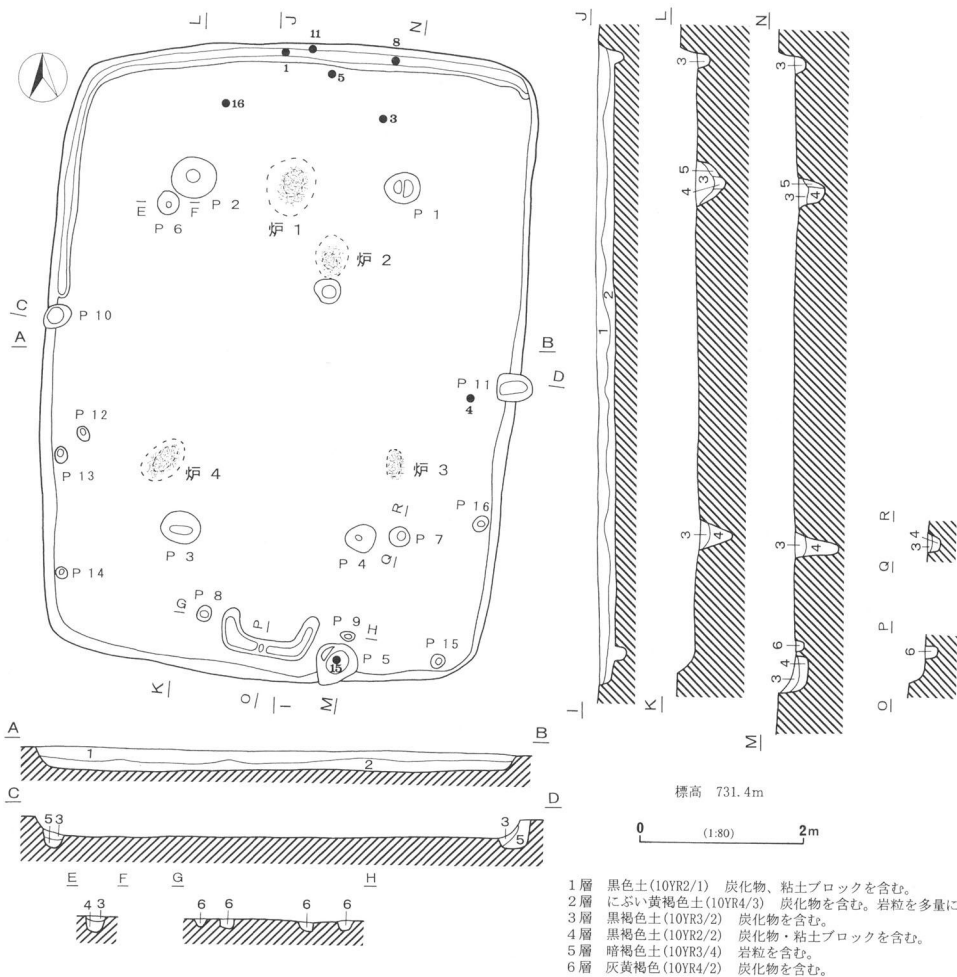
(9) H12号住居址 (第17・19図 写真42・43・45)

Oツ5グリッドに位置し、標高730m程の南緩斜面に立地する。黄褐色土を検出面とするが、耕作による削平が床面南半まで及び、検出部は北壁・西壁の一部と炉、柱穴6カ所である。残存部から推定すると主軸方位は東西にあり、少なくとも長軸長450cm・短軸長350cm程の規模にあつたと思われる。柱穴はP1～P4が支柱穴と考えられる。径30cm・深さ15～30cm程の大きさである。また、径25cm・深さ19cmのP5と径15cm・深さ14cmのP6がP3・P4それぞれの西南脇に存在していた。炉址は2カ所が確認された。炉1は支柱穴P1・P2間の中央部にある。長軸方向は東西にあり、62cm×55cm・深さ10cmの楕円形を呈する掘り込みで、厚さ5cmの焼土範囲が確認された。炉2は支柱穴P3・P4間の中央部やや西側にある。径45cm・深さ16cm程の円形を呈する掘り込みで、厚さ8cmの焼土範囲が確認された。

検出遺物は壺底部があり、第19図6の外面に赤色塗彩された大形壺底部はⅢ区西壁脇床面で潰れた状態で検出されている。

表1 住居址計測表

遺構名	長軸方位	長軸長	短軸長	壁残高	面積	P1～2間長	P3～4間長	P1～4間長	P2～3間長
H4	N-3°-E	750	560	25	39.2	254	220	430	430
H5	N-96°-E	△420	△300	6	△13	164	180	274	290
H6	N-7°-W	628	△430	7	△28	234	214	386	366
H7	N-16°-W					210	190	290	300
H8	N-15°-W	510	410	34	19.6	150	154	210	208
H9	N-84°-E	430	364	50	15.4	200	192	264	254
H10	N-87°-E	△540	△450	5	△24	186			324
H11	N-85°-E	△420	△300	6	△12	208	182	276	264
H12	N-86°-E	△450	△350	6	△16	200	220	240	220



第6図 H4号住居址

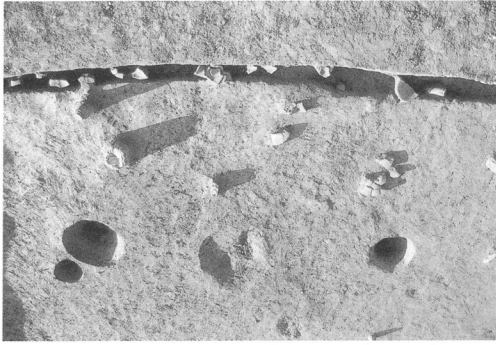


写真16 炉1と北側周溝の遺物（南から）

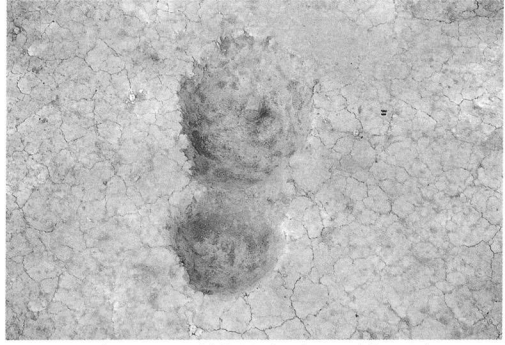


写真17 H4号住居址の炉2（南から）



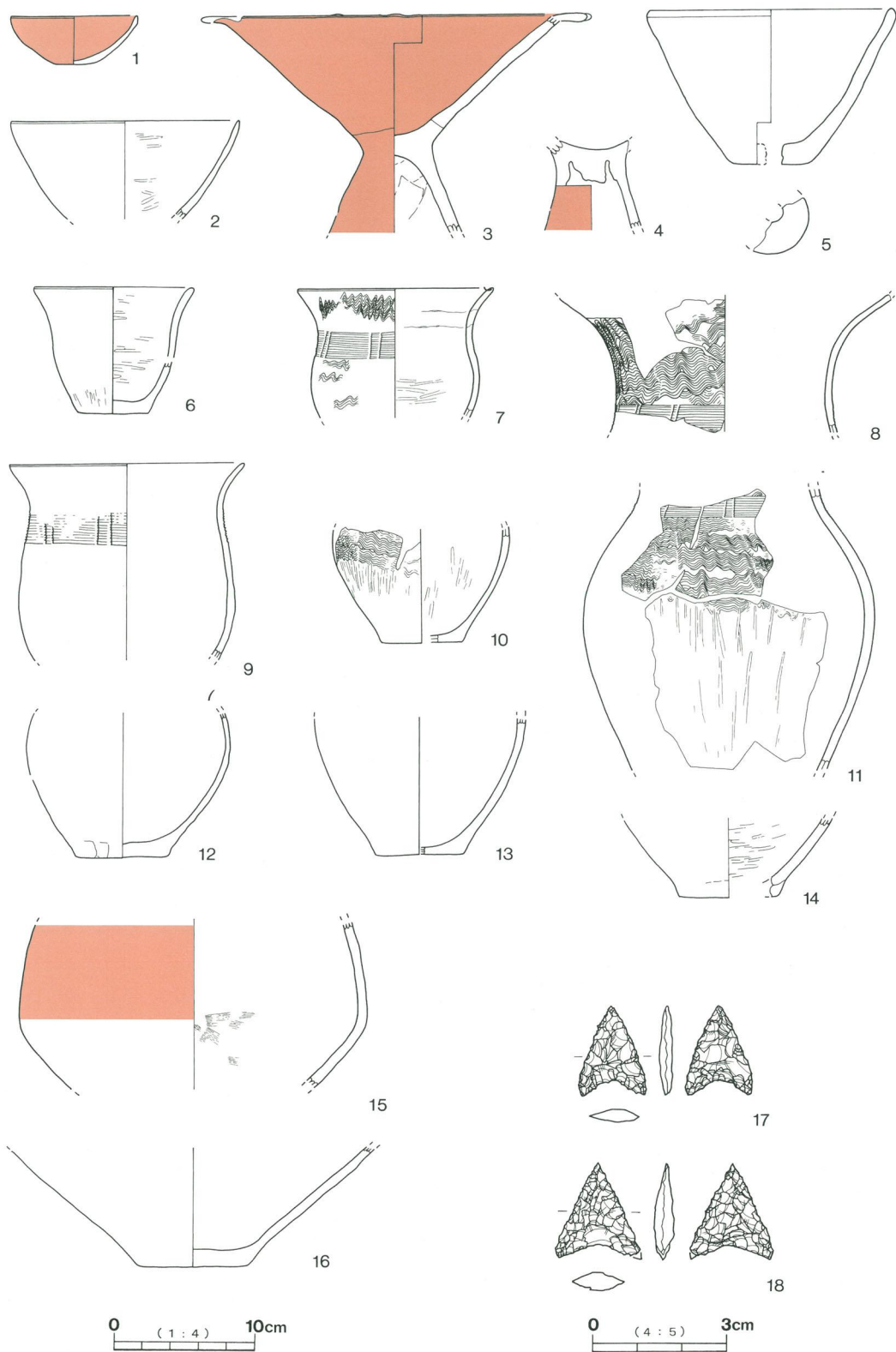
写真18 H4号住居址の炉3（南から）



写真19 H4号住居址の炉4（南から）



写真20 H4号住居址（南から）



第7図 H4号住居址の土器と石器

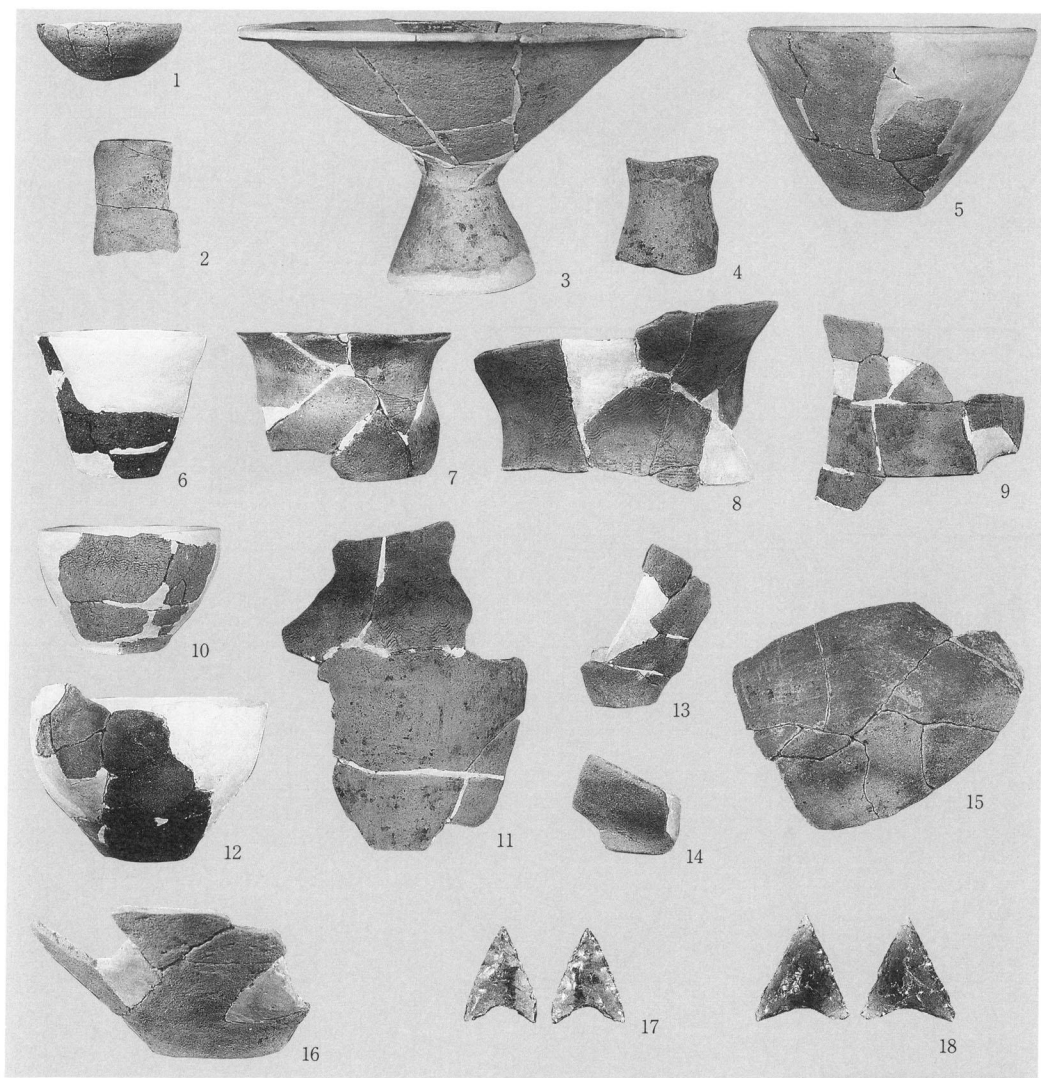


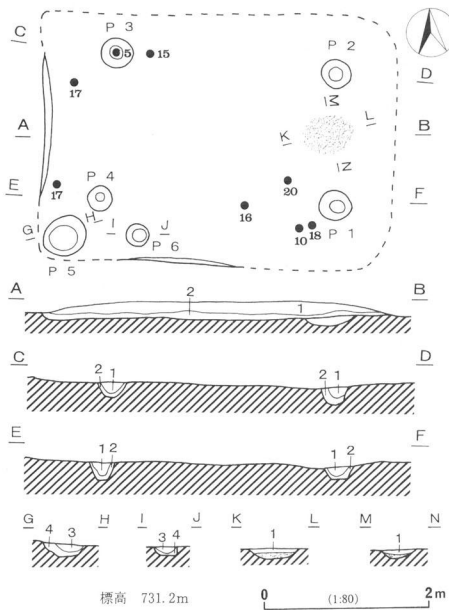
写真21 H4号住居址の土器と石器

表2 H4号住居址土器一覧表

番号	器形	口径	底径	器高	成 形 ・ 調 整	出 土 位 置	備 考
1	鉢	91	31	35	内面：ミガキ→赤色塗彩 外面：ヘラクスリ→ミガキ→赤色塗彩 底部：ミガキ	北壁周溝	完全実測
2	鉢	△163		*70	内面：ミガキ	IV区	回転実測
3	高坏	△275		*155	内面：坏部ミガキ→赤色塗彩、脚部ナデ 外面：ミガキ→赤色塗彩 口縁突起2	H4・I区とH8・P5	完全実測
4	高坏			*64	外面：ヘラミガキ→赤色塗彩	P11脇	完全実測
5	瓶	△178	△55	111	孔径11~15	北壁周溝脇	回転実測
6	甕	△115	△50	△90	内面：ヘラミガキ 外面：ヘラミガキ	Ⅲ・Ⅳ区	回転実測
7	甕	△139		*92	内面：ヘラミガキ 外面：櫛描波状文、櫛描簾状文(12本)	I・Ⅲ・Ⅳ区	回転実測
8	甕				内面：ヘラミガキ 外面：櫛描波状文→櫛描簾状文	北壁周溝	回転実測
9	甕	△168		*140	外面：櫛描簾状文	IV区	回転実測
10	甕		△58	*82	内面：ヘラミガキ 外面：櫛描波状文(8本)→下半ヘラミガキ	Ⅲ区	回転実測
11	甕				内面：ヘラミガキ 外面：櫛描波状文(9本)→櫛描簾状文(9本)→ヘラミガキ	北壁周溝	回転実測
12	甕	△65		*103	内面：ナデ 外面：ヘラナデ	Ⅱ区	回転実測
13	甕	△63		*98		Ⅲ・Ⅳ区	回転実測
14	甕	△76		*56	内面：ヘラミガキ 外面：ヘラミガキ	Ⅲ区	回転実測
15	壺				内面：刷毛目 外面：ヘラミガキ→赤色塗彩	P5	回転実測
16	壺		△78	*85		Ⅱ区	回転実測

表3 H4号住居址石器一覧表

番号	器 種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備 考
17	石鏃	黒曜石	20	15	3	0.6	I区	
18	石鏃	黒曜石	21	*19	5	0.5	P6	右脚部先端欠損



- 1層 黒色土 (10YR2/1) 粘土ブロックを含む。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化物を多く含む。
焼土粒・粘土ブロックを含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物・焼土ブロックを多く含む。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/4) 岩粒を含む。

第8図 H5号住居址



写真22 H5号住居址の炉 (西から)

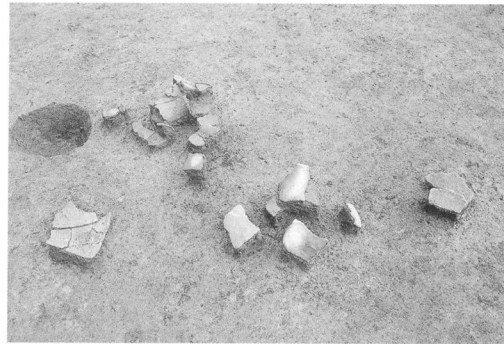
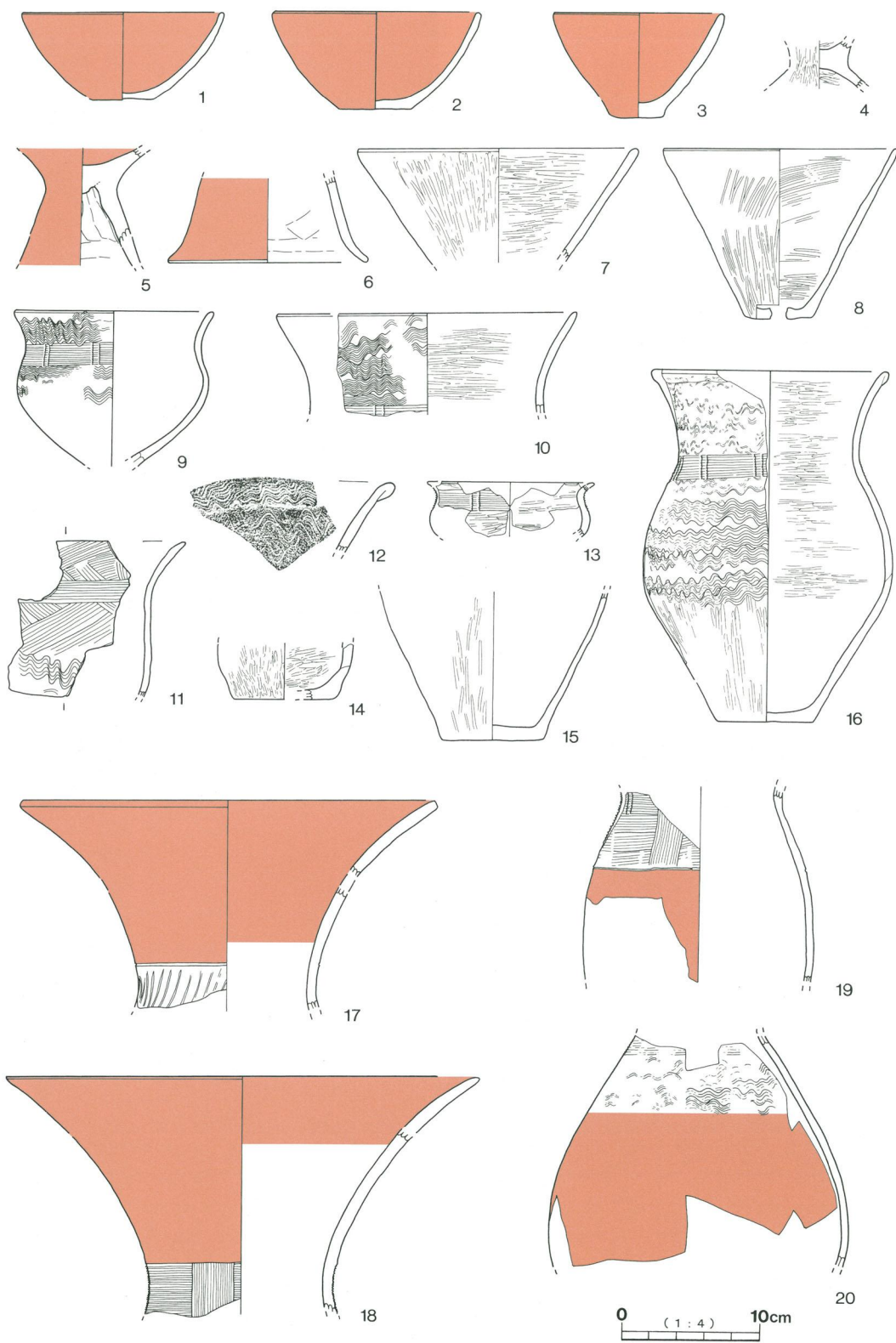


写真23 P1周辺の土器 (北から)



写真24 H5号住居址 (西から)



第9図 H5号住居址の土器

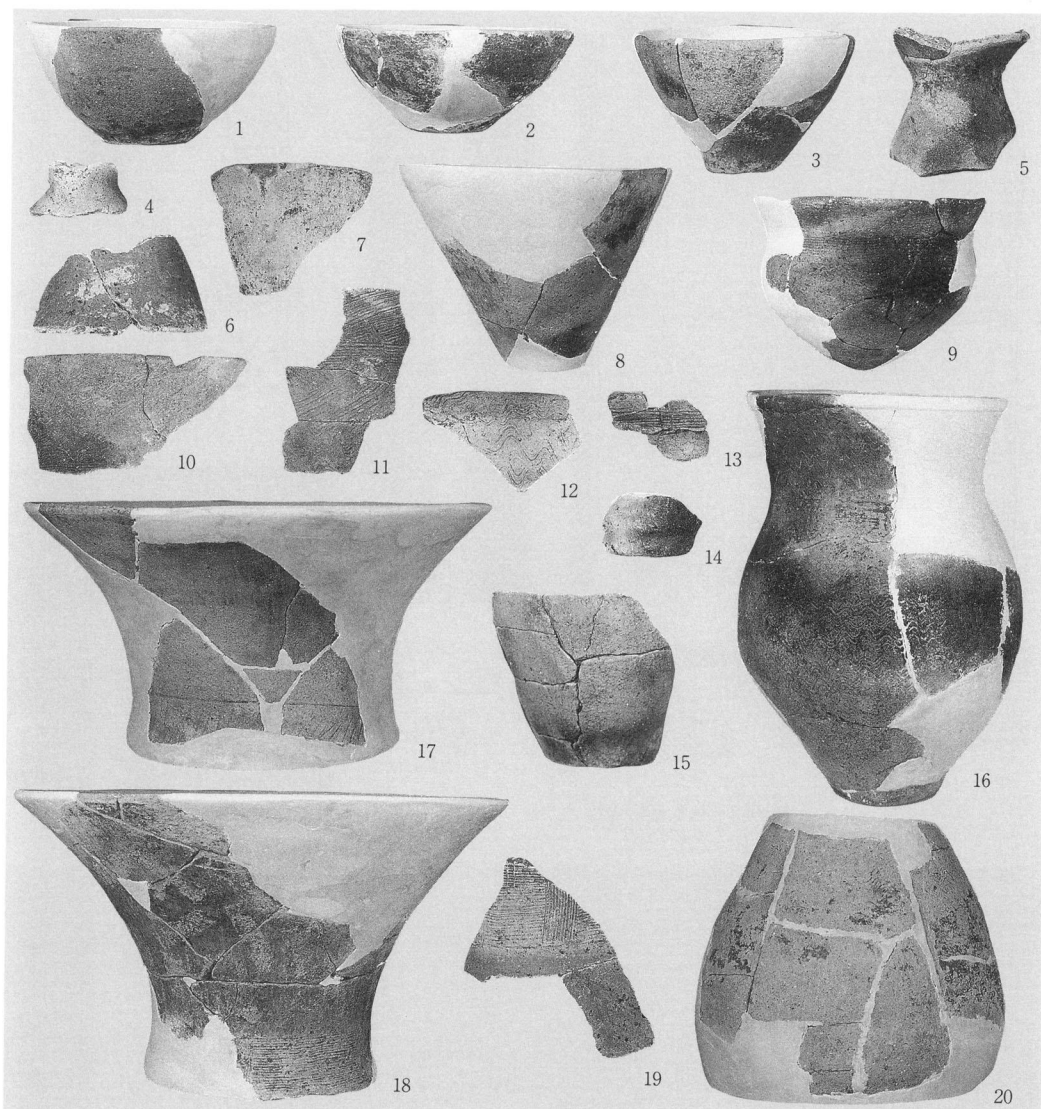
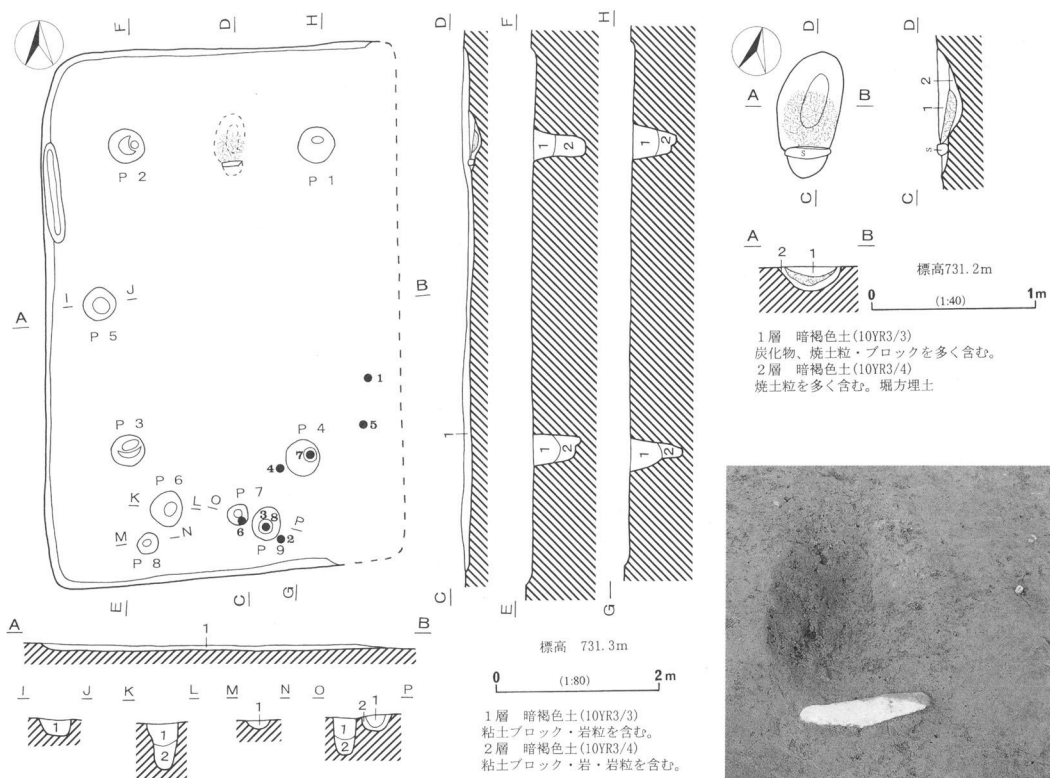


写真25 H5号住居址の土器

表4 H5号住居址土器一覧表

番号	器形	口径	底径	器高	成形・調整	出土位置	備考
1	鉢	△146	47	63	内面：ミガキ→赤色塗彩 外面：ミガキ→赤色塗彩 底部：ミガキ→赤色塗彩	Ⅲ区	完全実測
2	鉢	△150	△52	70	内面：赤色塗彩 外面：赤色塗彩	Ⅲ区	回転実測
3	鉢	△122	39	75	内面：ミガキ→赤色塗彩 外面：ミガキ→赤色塗彩 底部ミガキのみ	Ⅱ区	完全実測
4	高坏?				内面：坏部ヘラミガキ、脚部ヘラナデ→ヘラミガキ 外面：ヘラミガキ	Ⅲ区	完全実測
5	高坏			*84	内面：坏部ミガキ→赤色塗彩、脚部ヘラナデ 外面：ミガキ→赤色塗彩	P 3 上面	回転実測
6	高坏		△144	*61	内面：ナデ 外面：ミガキ→赤色塗彩	Ⅲ区	回転実測
7	鉢?	△202		*82	内面：ヘラミガキ 外面：ヘラミガキ	Ⅲ区	回転実測
8	甌	△169	△48	△122	内面：刷毛目→ヘラミガキ 外面：刷毛目→ヘラミガキ	P 2	回転実測
9	甌	△144		*111	内面：ナデ 外面：櫛描簾状文(10本)、櫛描波状文	Ⅲ区	回転実測
10	甌	△216		*73	内面：ヘラミガキ 外面：櫛描波状文(9本)、櫛描簾状文	I区	回転実測
11	甌			*112	内面：ヘラミガキ 外面：櫛描羽状文、櫛描縦線文、櫛描波状文	Ⅳ区	破片実測
12	甌			*52	内面：刷毛目→ヘラミガキ 外面：櫛描波状文	Ⅲ区	破片実測
13	甌?	△120		*39	内面：ミガキ 外面：頸部櫛描簾状文(10本)、ミガキ	Ⅳ区	回転実測
14	甌		△70	*39	内面：ヘラミガキ 外面：ヘラミガキ	Ⅲ区	回転実測
15	甌		△74	*107	内面：ナデ 外面：ヘラミガキ	Ⅲ区	回転実測
16	甌	△172	69	252	内面：ヘラミガキ 外面：櫛描波状文→頸部櫛描簾状文→下半ヘラミガキ	I区	完全実測
17	壺	△300		*151	内面：ミガキ→赤色塗彩、外面：ミガキ→赤色塗彩、篋描矢羽根状文	Ⅲ・Ⅳ区	回転実測
18	壺	△340		*170	内面：ミガキ→赤色塗彩 外面：ミガキ→赤色塗彩、頸部櫛描T字文(19本)	I区	回転実測
19	壺				内面：ナデ 外面：ヘラミガキ→赤色塗彩、櫛描簾状文・櫛描T字文	Ⅲ区	回転実測
20	壺				外面：ヘラケズリ→赤色塗彩、櫛描縦線文・櫛描波状文	I区	回転実測

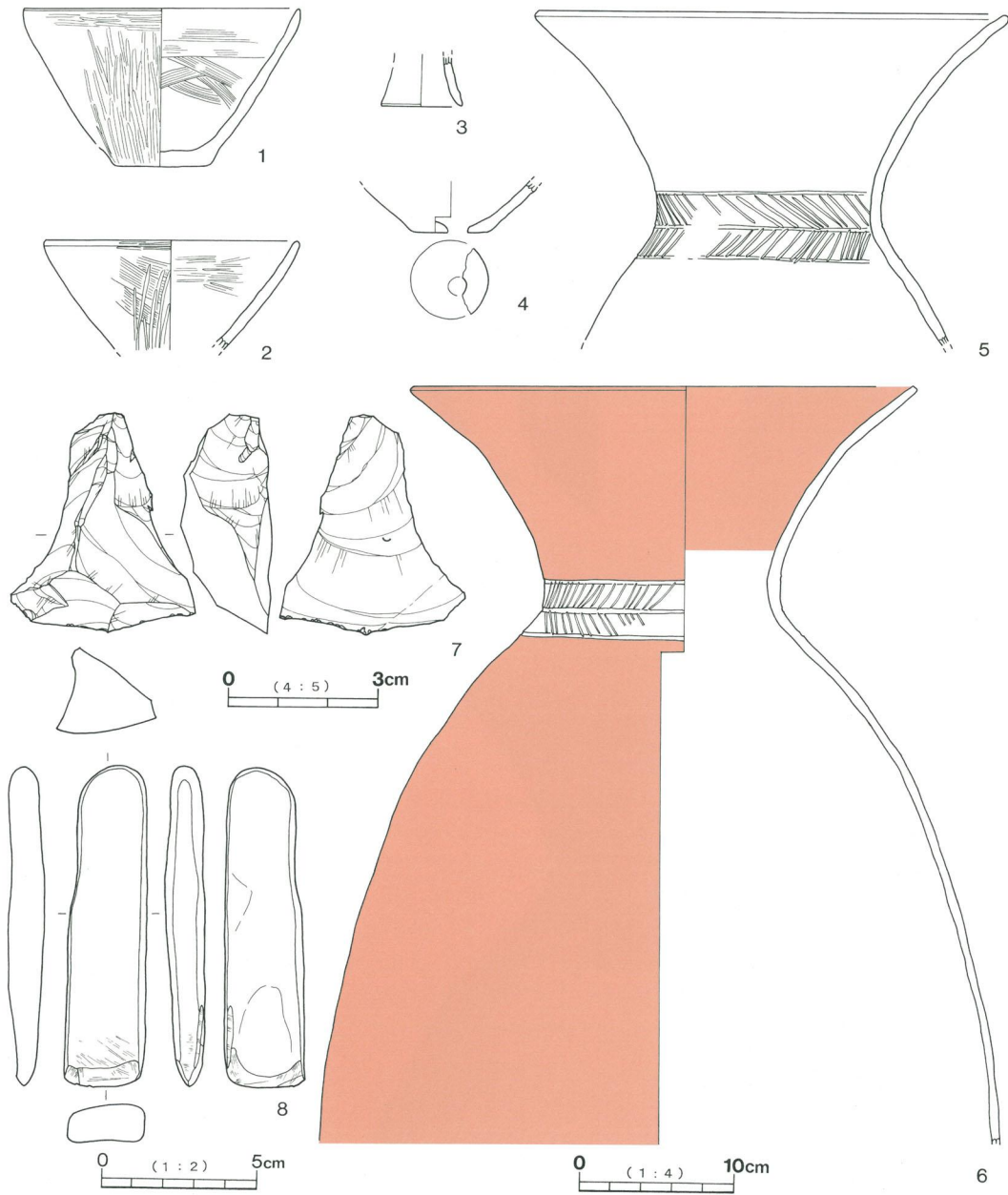


第10図 H 6号住居址

写真26 H 6号住居址の炉(南から)



写真27 H 6号住居址 (南から)、右下：P 7・9 上面の土器 (南から)



第11図 H6号住居址の土器と石器

表5 H6号住居址土器一覧表

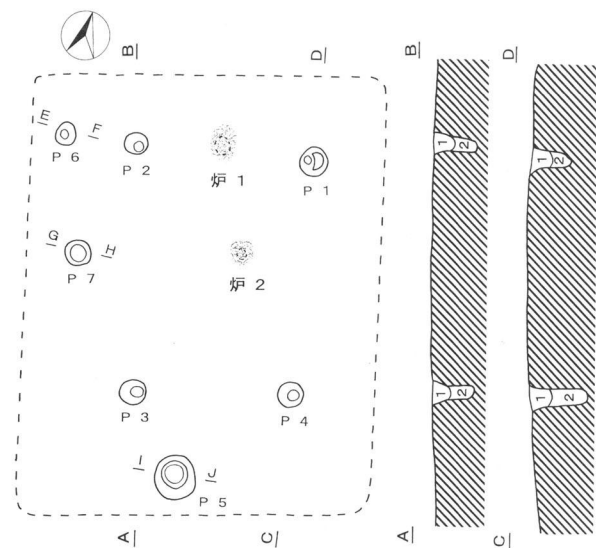
番号	器形	口径	底径	器高	成形・調整	出土位置	備考
1	鉢	△178	63	101	内面：ハケナデ 外面：ヘラミガキ	IV区	完全実測
2	鉢	△164		*70	内面：ヘラミガキ 外面：刷毛目→ヘラミガキ	P 9 上面	回転実測
3	高坏		53	*31	内面：ナデ 外面：ナデ	P 9	完全実測
4	甌		△51	*33	内面：ナデ 外面：ナデ	P 4 脇	回転実測
5	壺	△306		*212	外面：頸部篋描矢羽根状文	IV区	回転実測
6	壺	△326		*482	内面：ミガキ→赤色塗彩 外面：ミガキ→赤色塗彩、頸部篋描矢羽根状文	P 7	回転実測

表6 H6号住居址石器一覧表

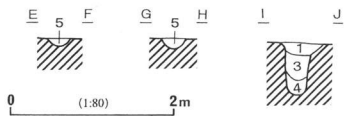
番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
7	剥片	黒曜石	44	37	17	14.7	P 4	端部縁微細剥離痕
8	磨製石斧	安山岩	103	26	12	50.2	P 9	刃部磨製



写真28 H 6号住居址の土器と石器



標高 731.3m



- 1層 暗褐色土(10YR3/3) 粘土ブロック・岩粒を含む。
- 2層 暗褐色土(10YR3/4) 粘土ブロック・岩粒を多量に含む。
- 3層 褐色土 (10YR4/4) 岩粒を多量に含む。
- 4層 褐色土 (10YR4/6) 粘土ブロック・岩粒を多量に含む。
- 5層 10YR3/3 粘土ブロックを含む、岩粒を多く含む。

第12図 H 7号住居址

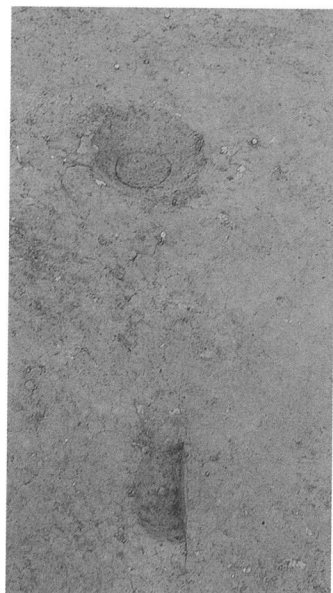


写真29 H 7号住居址の炉(南から)

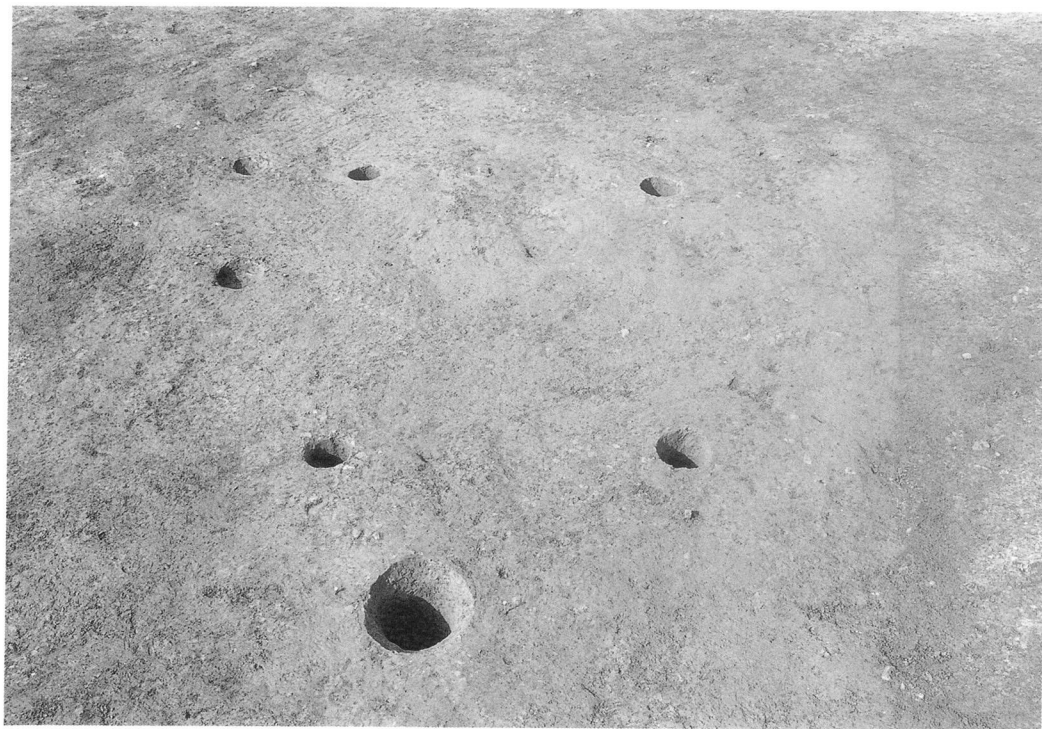
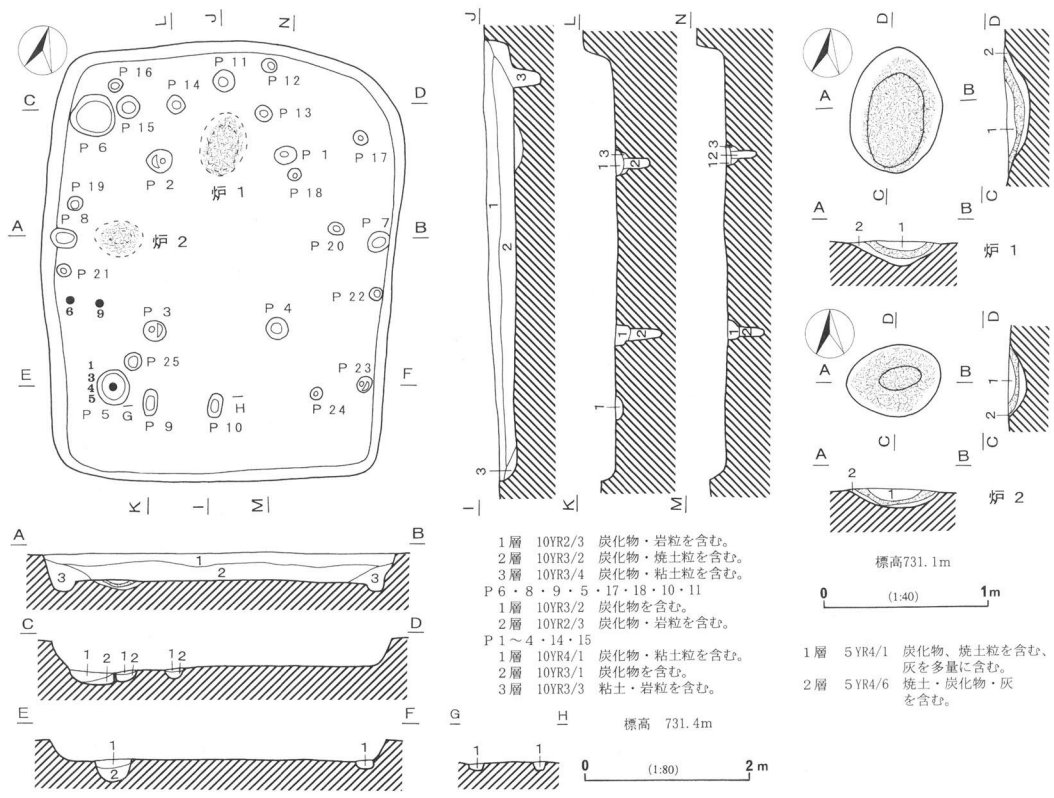


写真30 H 7号住居址 (南から)



第13図 H 8号住居址



写真31 H 8号住居址 (南から)



写真32 H 8号住居址の炉1 (南から)

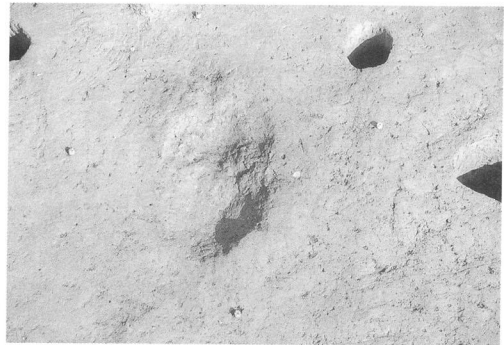


写真33 H 8号住居址の炉2 (東から)



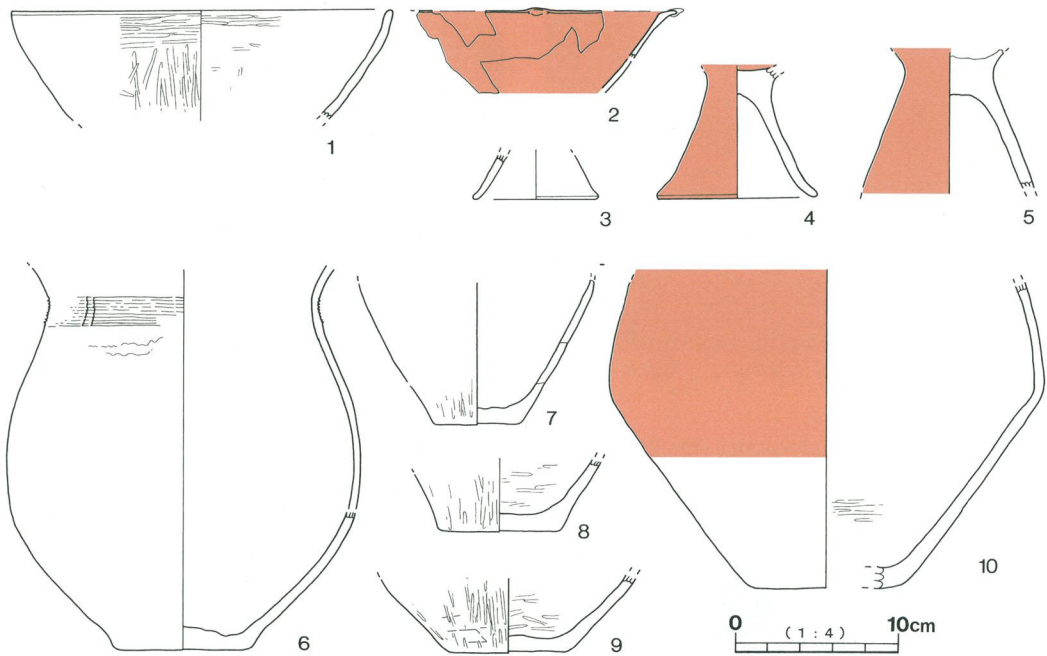
写真34 P 5内に廃棄された高坏 (南から)



写真35 西壁際に廃棄された甕 (南東から)



写真36 H 8号住居址Ⅲ区に廃棄された遺物 (西から)



第14図 H 8号住居址の土器

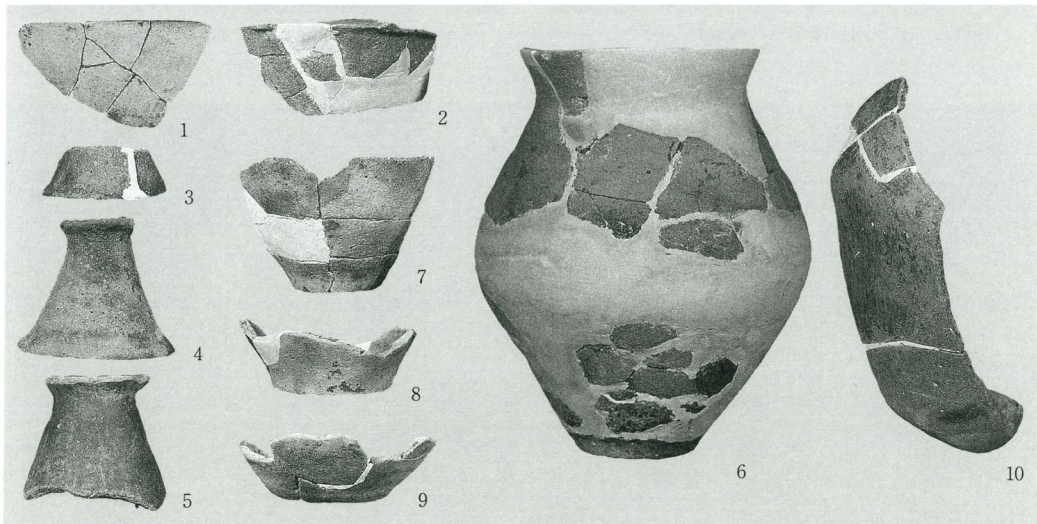
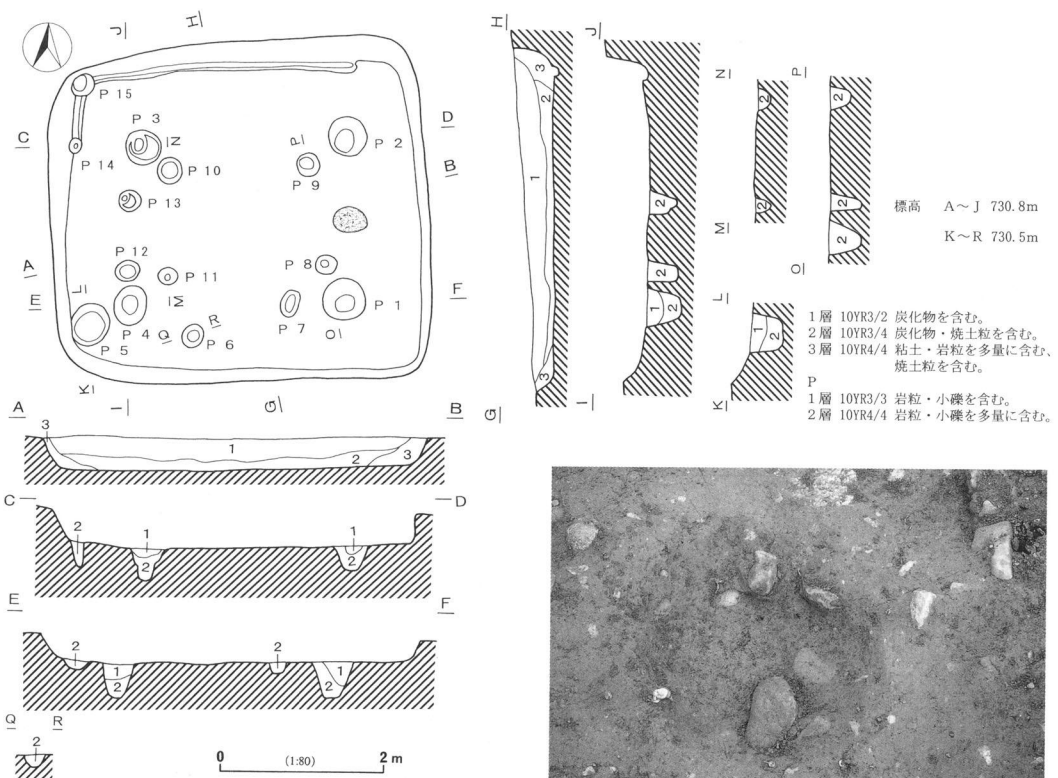


写真37 H 8号住居址の土器

表7 H 8号住居址土器一覧表

番号	器形	口径	底径	器高	成形・調整	出土位置	備考
1	鉢?	△234		*67	内面：ヘラミガキ 外面：ヘラミガキ	P 5	回転実測
2	高坏				内面：ヘラミガキ→赤色塗彩 外面：ヘラミガキ→赤色塗彩(剥落)	Ⅲ区	破片実測
3	脚部		△77	*27	内面：ナデ 外面：ナデ	P 5	回転実測
4	高坏		99	*75	内面：坏部ヘラミガキ→赤色塗彩、脚部ナデ 外面：ヘラミガキ→赤色塗彩	P 5	完全実測
5	高坏				内面：坏部剥落、脚部ナデ 外面：ヘラミガキ→赤色塗彩	P 5	回転実測
6	甕		△82	*236	外面：頸部櫛描状文、体部櫛描波状文	Ⅲ区	回転実測
7	甕		54	*86	外面：体部下半ヘラミガキ	Ⅲ区	完全実測
8	甕		75	*43	内面：ヘラミガキ 外面：ヘラミガキ	I・Ⅱ区	完全実測
9	壺	△72		*45	内面：ヘラミガキ 外面：ヘラズリ→ヘラミガキ	Ⅲ区	回転実測
10	壺	△96		*186	内面：ヘラミガキ 外面：ヘラミガキ→赤色塗彩	Ⅱ区	破片実測



第15図 H 9 号住居址



写真38 H 9 号住居址の炉 (西から)

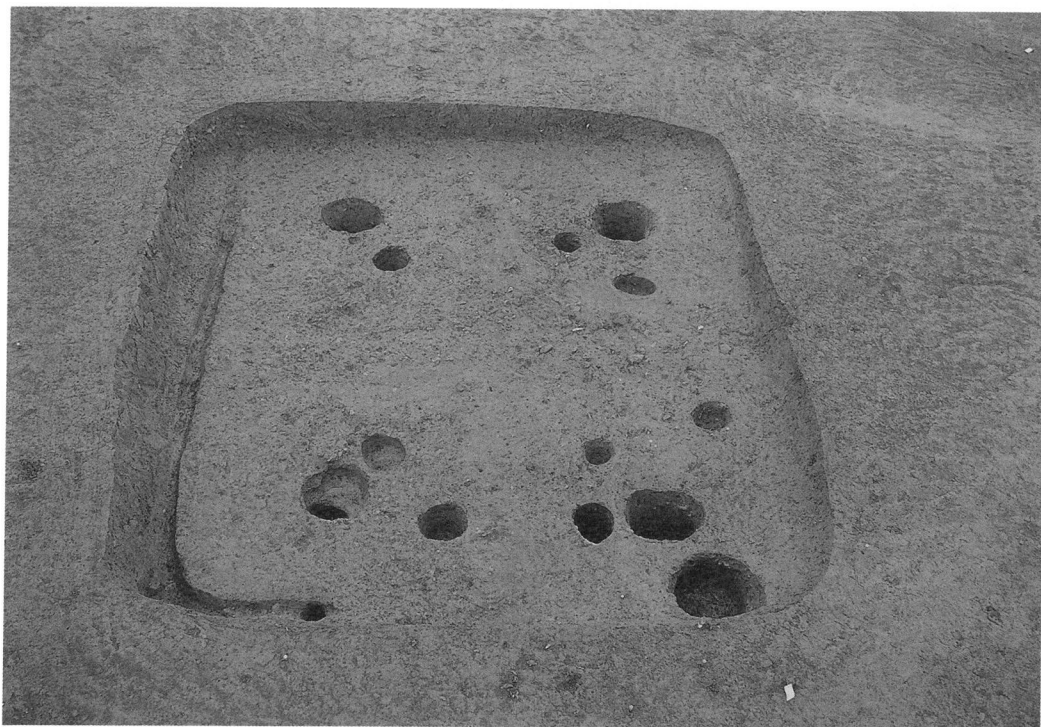
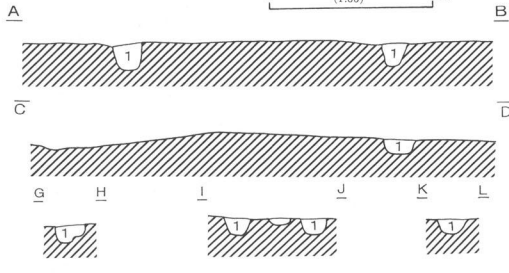
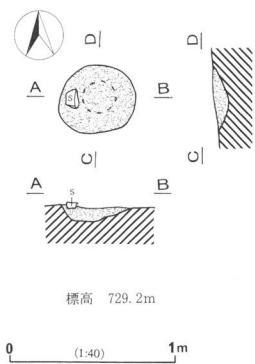
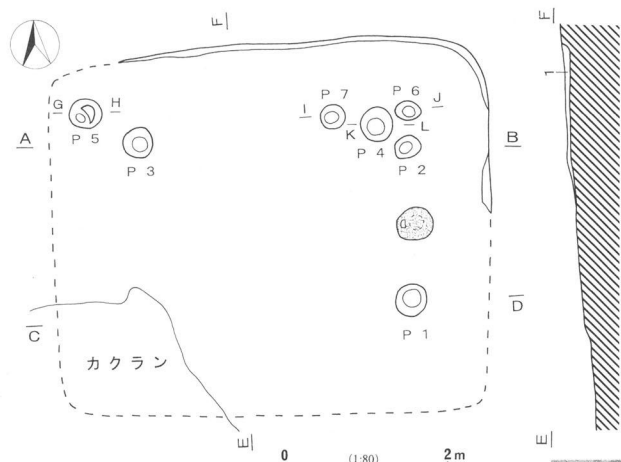


写真39 H 9 号住居址 (西から)



1層 10YR3/4 粘土ブロック・岩粒を含む。 標高 729.5m

第16図 H10号住居址



写真40 H10号住居址の炉（西から）



写真41 H10号住居址（西から）

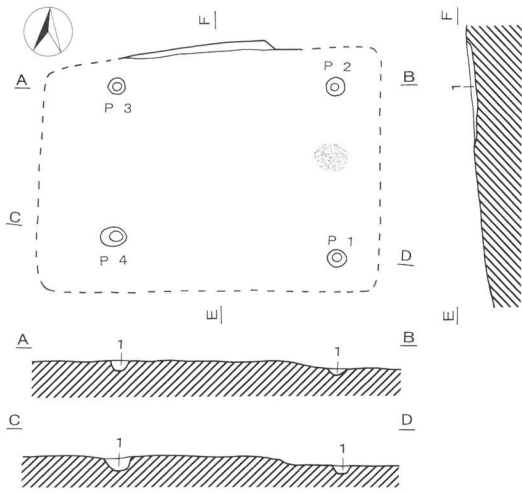


写真42 H11号住居址の炉（南東から）

1層 10YR3/4 粘土ブロック・岩粒を含む。

標高 729.9m

0 (1:80) 2m

第17図 H11号住居址

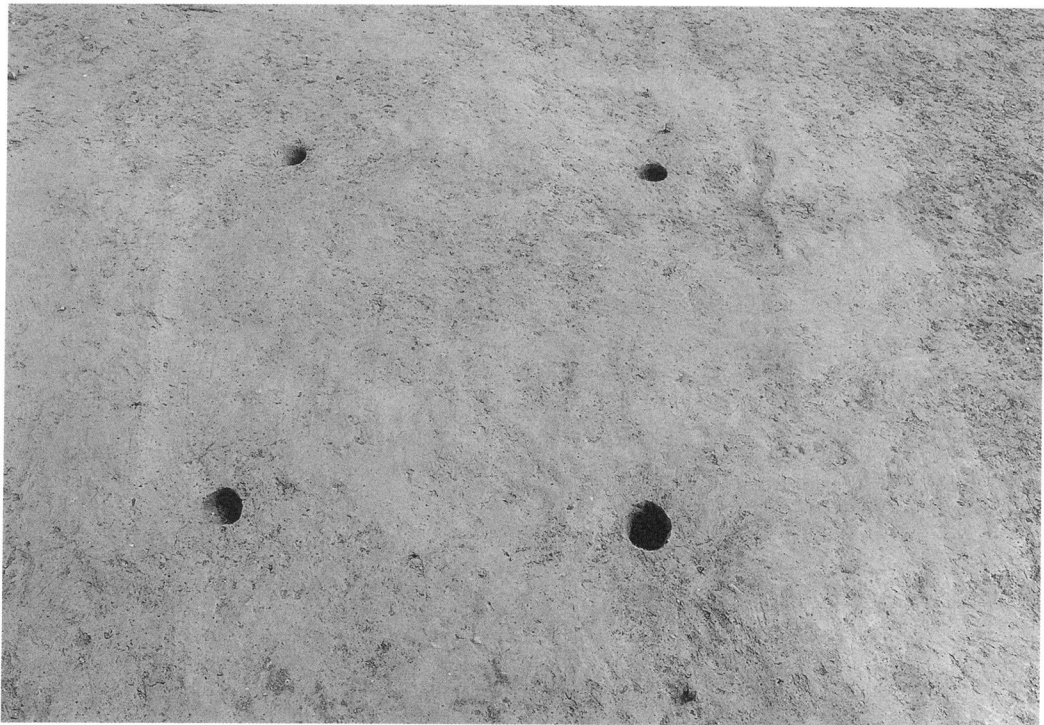
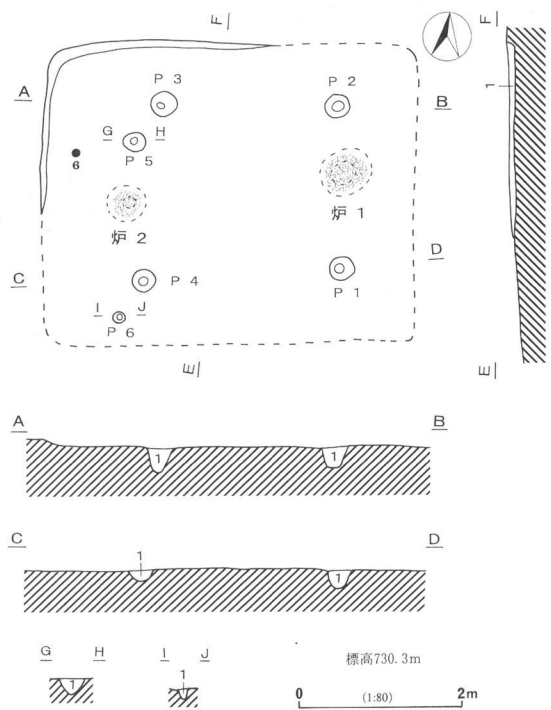
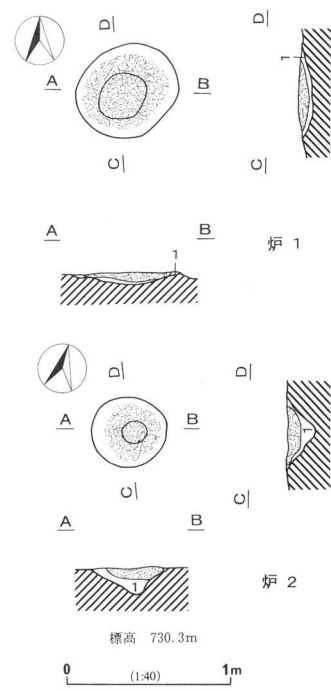


写真43 H11号住居址（西から）



1層 10YR3/3 粘土ブロック・岩粒を多く含む。

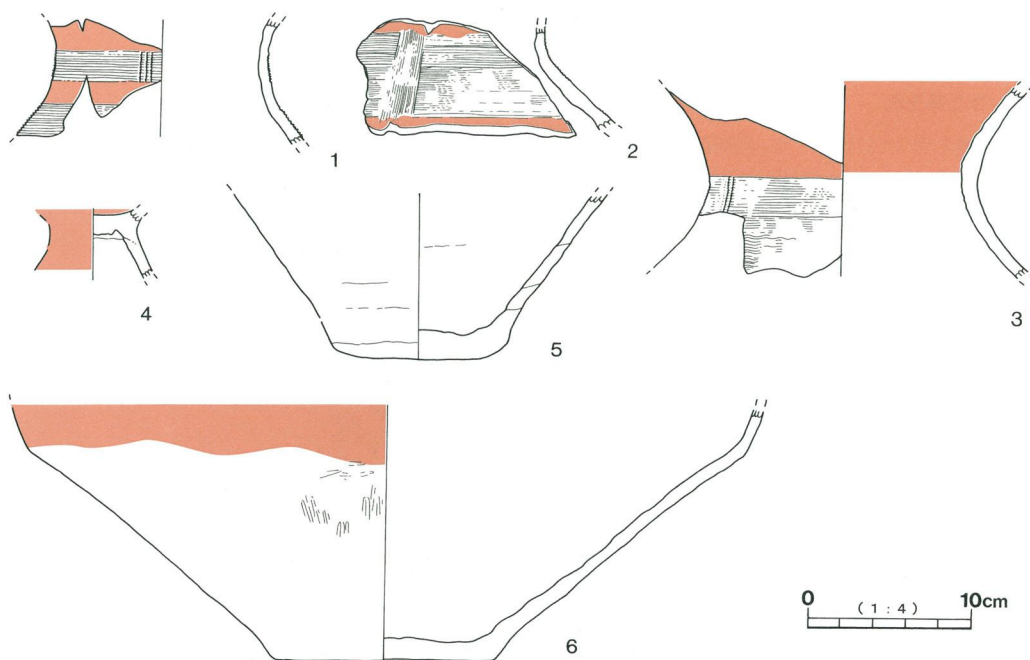


1層 暗褐色土(10YR3/4) 焼土粒を多く含む。

第18図 H12号住居址



写真44 H12号住居址 (西から)



第19図 H 9～12号住居址の土器

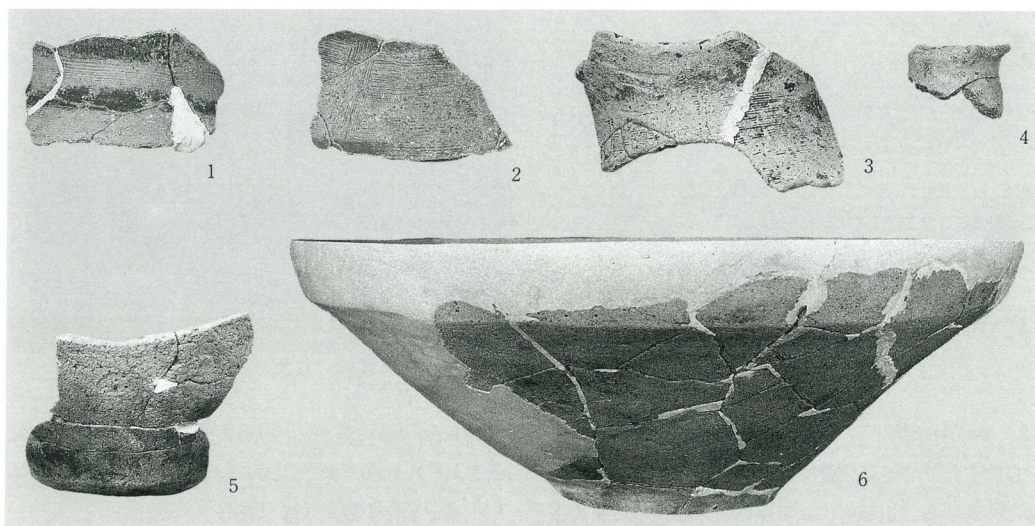


写真45 H 9～12号住居址の土器

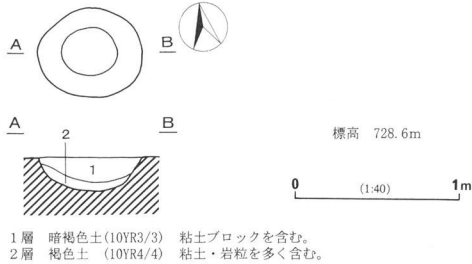
表 8 H 9～12号住居址土器観察表

H 9					成形・調整	出土位置	備考
番号	器形	口径	底径	器高			
1	壺				外面：ヘラミガキ→赤色塗彩、櫛描籐状文・櫛描横線文	P 6	回転実測
2	壺				外面：ヘラミガキ→赤色塗彩、櫛描T字文	I - III区	破片実測
H10					成形・調整	出土位置	備考
番号	器形	口径	底径	器高			
3	壺			*116	内面：口縁部ヘラミガキ→赤色塗彩 外面：口縁部ヘラミガキ→赤色塗彩、頸部櫛描籐状文・櫛描波状文	III区	回転実測
H11					成形・調整	出土位置	備考
番号	器形	口径	底径	器高			
4	高坏			*43	内面：坏部ヘラミガキ→赤色塗彩、脚部ナデ 外面：赤色塗彩	I区	完全実測
H12					成形・調整	出土位置	備考
番号	器形	口径	底径	器高			
5	壺		108	*100		I・II区	完全実測
6	壺		135	*155	外面：ヘラミガキ→上半部赤色塗彩	No 1	回転実測

2 土坑

(1) D 2号土坑

○ナ10グリッドに位置する。標高728.5m程の南斜面に立地する。主軸方位は斜面方向に直交する東西方向にある。64×55cmの楕円形を呈する小形土坑である。



第20図 D 2号土坑

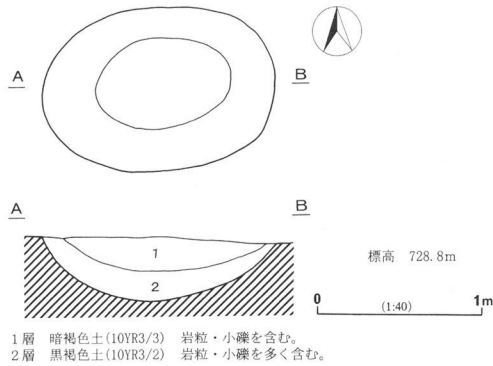
底部は丸味をおび断面形は半円形で深さ22cmである。遺物は検出されていない。



写真46 D 2号土坑 (南から)

(2) D 3号土坑

○テ・ト9グリッドに位置する。標高728.7m程の南斜面に立地する。主軸方位は斜面方向に直交する東西



第21図 D 3号土坑

方向にある。142×100cmの楕円形を呈する土坑である。丸味をおびた底部で深さ40cmの断面は半円形を呈す。遺物は検出されなかった。

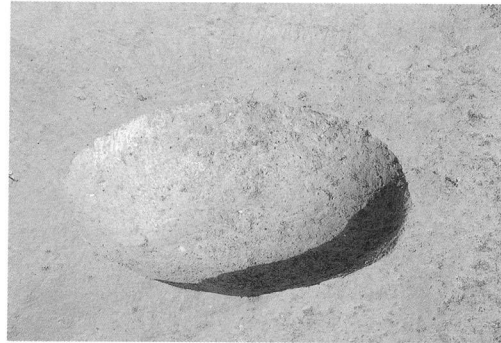
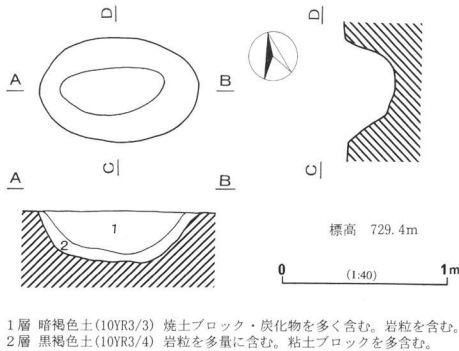


写真47 D 3号土坑 (南から)

(3) D 4号土坑

○ツ7グリッドに位置する。標高729.2m程の南緩斜面に立地する。主軸方位は斜面方向に直交する東西方



第22図 D 4号土坑

向にある。98×63cmの楕円形を呈する土坑である。丸味をおびた底部で深さ3cmの断面は半円形を呈す。弥生土器十数片が覆土1層で検出された。

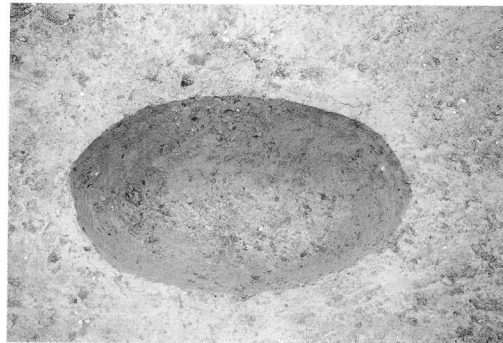


写真48 D 4号土坑 (南から)

IV 東久保古墳群 1号墳の調査

1 調査の概要

遺跡名	東久保（ひがしくぼ）古墳群 1号墳	検出遺構	古墳時代後期古墳 1基
略称	HHK 1	墳丘	円墳（直径10m）
所在地	長野県佐久市大字平賀字東久保3398・3399	石室	横穴式石室（長さ5.6m）
発掘調査期間	平成13年7月19日～同年10月26日	出土遺物	鉄製直刀1、鉄製鏝1、鉄製刀子1
発掘調査面積	371.3㎡		勾玉3、須恵器甕



第23図 東久保古墳群 1号墳（1：100）

2 東久保古墳群 1号墳の墳丘と石室

(1) 現況

東久保古墳群 1号墳は古くから周知されていた古墳である。佐久市が 1号墳とした以前から、県では「東久保古墳」と登録されていた古墳で東久保古墳群において明確かつ最大の古墳である。しかし、度重なる盗掘と耕作による削平で、墳丘は壊滅状態であった。

調査前の状態は、天井石の取り除かれた玄室の奥壁と側壁の一部及び西側外護列石の上面が、平に整地された畑地に露出する状況にあった。古墳前方は牧場建設で造成され急崖を呈していたが、石室前面に築造当時の斜面が僅かに残存しており、耕作土の流失を防ぐために、崩落した古墳用材礫を用いた石垣が築かれていた。そこには石室側壁石・天井石の一部と考えられる巨大礫も据え置かれていた(写真2)。

石室内の堆積は人為的に埋め戻されたものであった。玄室の露出した石で囲まれた範囲では①層上面に焼き火の痕跡が見られた(写真50)。②層は大形礫を詰め込むことによって玄室の埋め戻しが行われたことを示す(写真54・55)。玄室床面中央部は190cm×150cm・深さ30cm盗掘坑により礫床が取り除かれていたが、それを埋め戻し(④層)床として整地して、火を焚いた痕跡(③層)が残されていた(写真57)。その上面には瀬戸美濃碗・砥石などが廃棄されていた。

(2) 墳形と墳丘

墳形は前面の裾に外護列石を巡らす円墳と考えられる。墳裾外護列石の東西間長は10mを測ることから、直径10m規模の円墳であったと想定される。石室主軸による古墳の主軸方位は国家座標の北より7度ほど東にずれている。墳丘の高さは削平され不明であるが、残存する奥壁石の高さが1.5mであることから、少なくとも2mは越えていよう。いずれにしても、平地に接する斜面に構築されていることから、平地から見上げた景観は実物より雄大に感じたであろう。

東側には最大幅210cm・深さ30cmの周溝と考えられる掘り込みがある(写真58)。斜面上部では古墳主軸より2.4m東側の地点から浅く狭い掘り込みとして始まり、地形に沿って傾斜する。墳丘中央部が最も広がる。前

方は削平により築造時の状況は不明であるが、現状では斜面に開いている。周溝底部から崩落礫・須恵器大甕破片が検出されていることから(写真51・52)、古墳築造時に機能していたことは明確であるが、その形状と地形とのあり方から、自然の小谷地形に手を加えたとも考えられる。

古墳裾の外護列石は全周ではなく、前面の半周に限定されていた。根石部分の確認であるが、東側の根石が60×40cm前後の大きさで、西側の根石が100×80cm前後の大きさであった。外護列石が前方のみに存在していたこと、西側の根石が一回り大きい要因は、より荷重を受ける斜面方向への横ずれを防ぎ強固にするためであろう。また、西側外護列石下方の斜面では多くの崩落礫(写真56)が確認されており、より多くのより強固な石積みの存在が示唆されている。用いられた礫は凝結安山岩で、円礫・亜円礫が滑津川などの河川から、大形亜角礫が東部山地がら運び込まれたものと考えられる。後者は、自然層のV層中にも存在するため背後の丘陵地からの供給も想定できる。

墳丘土は黒褐色粘質土と黄褐色硬質土からなる(2層)。前者はV層、後者は地山のⅦ層と思われる。これらは墳裾外護列石から裏込め石間での部分的な確認であるが、黒褐色土と黄褐色土を交互に突き固めた版築工法的なあり方も見られた(写真71・72・77)。

(3) 石室

石室は横穴式石室で、その型式は佐久地方で普遍的な所謂「玄門付両袖式」である。奥壁から羨道部先端までの長さは5.6mを測る。本地域では大形石室の一つに数えられる。石室は南側に開口するが、前述のように国家座標の南北とは7度程異なり、斜面傾斜方向である西側よりとなつている。

玄室は矩形を呈し、奥壁幅と前壁幅は共に1.8mを測る。中央部幅は推定2m程でやや広がる。奥壁から玄門中央部までの長さは3.3mである。床面積は6㎡程の規模である。

現状の奥壁は長さ2.1m、高さ1.5mを有する巨大な一枚岩の横置き立石である(写真60)。

西側壁では奥壁側で長さ1.8m・高さ1.2mの大形板状礫からなる腰石が、玄門側で長さ1.2m・高さ1mの大形板状礫からなる腰石が確認された。また、玄門に接して長さ0.3m・高さ1mの柱状礫が組み込まれ側壁の長さが調整されていた。なお、奥壁に接する箇所では腰石の上に50×35cmの板状礫が小口積みされており、2段目の一端が知られた(写真66)。

東側壁では調査前の状況で西側壁と同様に2個の腰石と1個の柱状礫で構成されていたが、玄門側の腰石はやや小形の礫で据え直された状態にあり、築造時の腰石は抜き取られていた。ただし、腰石2個という構成は本来のあり方と考えられる。奥壁側に残存した腰石は長さ1.7m・高さ1mの大形板状礫であり、玄門に接する位置に組み込まれた柱状礫は長さ0.6m・高さ1mである。そして、抜き取られた腰石は長さ1.1m・高さ1m程の大形板状礫と推定される(写真65)。以上の大形板状礫は溶結安山岩(凝灰岩)の自然礫であるが、その摂理構造から人為的な割石と同質な平坦で広い面を有する点で、石室用材としてもっとも多用された石材である。前述したように佐久東部山地を原産地とし、背後の丘陵にも存在するが、奥壁用材の様に厳選された礫は、より山間部から意図的に運び込まれたものであろう。

玄門部は2つの立柱石と仕切石からなる。立柱石間の幅は1mである。立柱石は東西ともに長さ1.1m・高さ0.7mの板状礫を横置きに立石させたものである。仕切石は長さ1m・高さ0.3mの板状礫を礫床の上に横置きしたものである(写真67・68)。

玄室内の床は、河川礫と考えられる拳大の円礫・亜円礫、砂利を敷き詰めた礫床である。前述したように盗掘のために玄室中央部は大規模に取り除かれており、比較的良好に築造時の礫床が確認されたのは玄門部脇と東側壁脇である(写真62)。そこから刀子・鏝が検出されている(写真63・64)。

羨道部は東西の側壁根石と床が残存していた。外護列石に連なる先端部から玄門中央部までの長さは2.3mである。幅は玄門・先端部の東西根石間で1mを測る。東西の側壁根石は70×20cm前後の扁平な亜角礫を小口面が揃うように横置きしたものである。床は側壁の根石より一回り小ぶりとなる扁平亜円礫を根石と

し、玄室の礫床と同等な拳大の円礫・亜円礫、砂利を敷き詰めた礫床である(写真67・68)。

(4) 石室の外部構造

玄室の東西側壁外側には幅0.8m前後の範囲に砂礫の充填からなる裏込めが施されていた(写真71・72)。またその外縁には裏込め石の擁護と所謂第2次墳丘形成に関わる内回りの外護列石が配置されていた。その根石は直径3.7m程で玄室を巡る。西側の根石は裏込め石に接して50×30cm程の亜角礫を主体に整然と配置されていた。それは墳裾の外護列石と同様に斜面方向への崩壊を擁護する配慮であろう。それに対して裏込め石とは距離を置く東側の根石は、主体が30×20cm程の礫でやや緩慢な配置であった(写真73)。

玄室奥壁では側壁と同様に砂礫を充填した後に奥壁高さ半分程まで黒・黄褐色土で盛土されている。そして、その上に砂礫充填(1a層)・礫充填(1b層)による裏込めを施していた(写真69・70)。

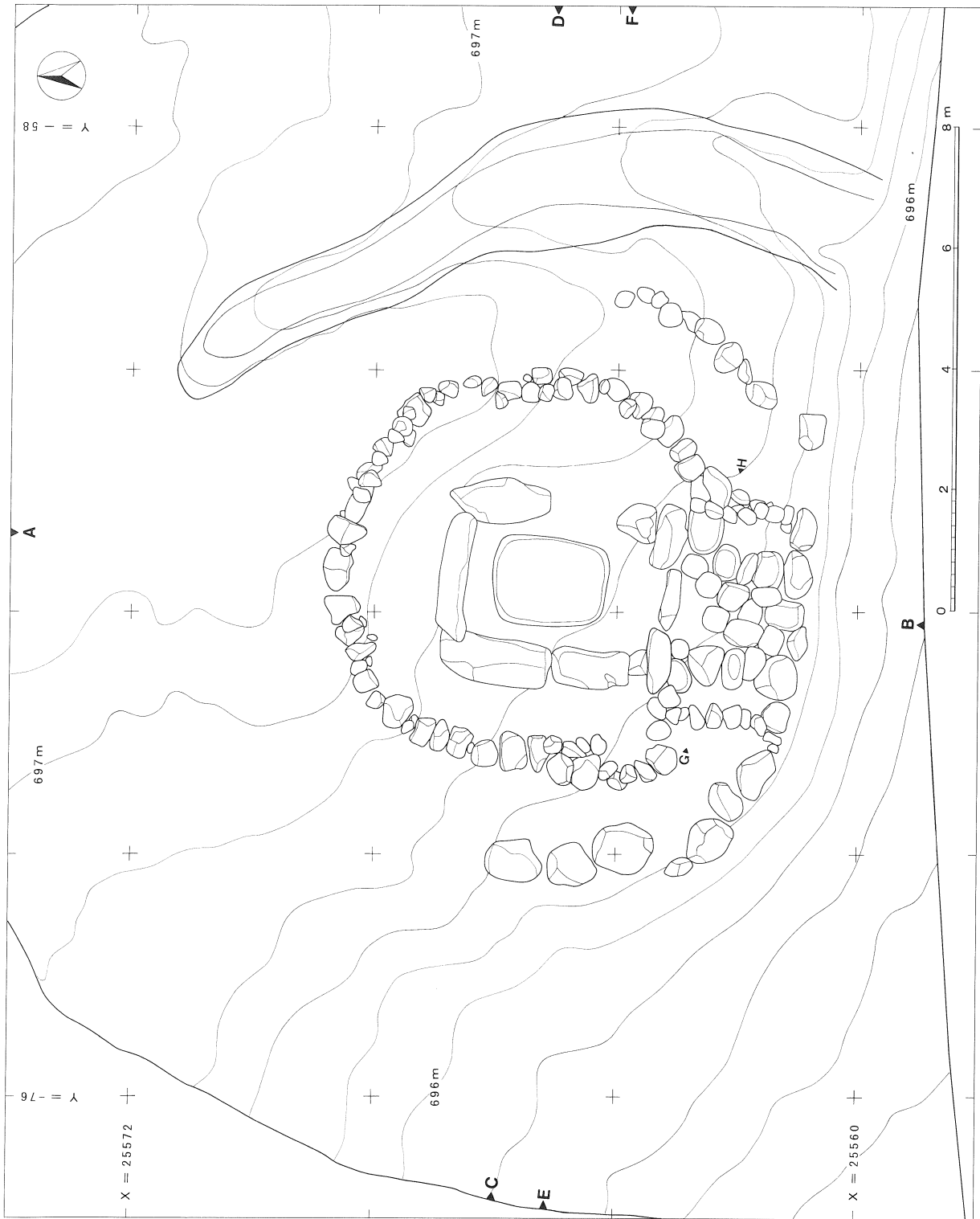
羨道部では根石の外側0.5mの位置に内回り・墳裾両方の外護列石に繋がる石列を配置し、その間に砂礫の充填からなる裏込めが施されていた。

(5) 築造計画

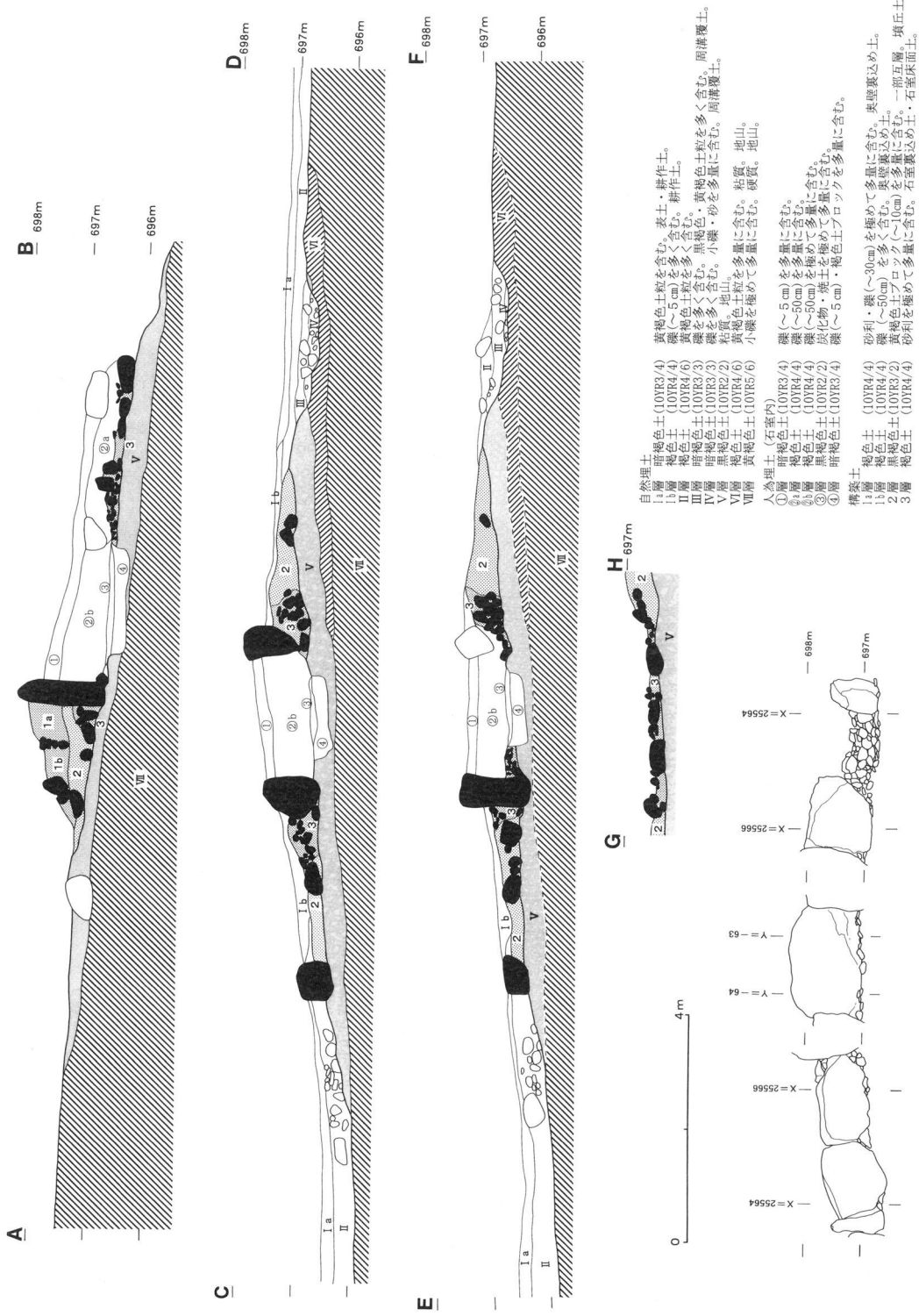
本古墳の占地は谷中の斜面部である。古墳築造時では西南方向に傾斜し、古墳が築造された場所では比高差1m程のやや緩やかな斜面であり、外護列石が設けられた古墳裾付近から急な斜面を呈していたと考えられる。古墳築造場所は盛土に用いられた黒褐色土(V層)が存在する範囲で、内回りの外護列石北部位置から石室構築のための削平が行われ玄室箇所では整地されるが、水平とはされず根石部分では斜面上部の北西側が高い状態にあった(写真78)。このことも、斜面側の西側において、より多くのより強固な石積みで石室と外護列石で行われていたことを示唆する。それは平地から見上げた場合に、もつとも雄大な姿に見える効果を考え、斜面前方・斜面西南側の構築を根石・裏込め・石積み・盛土すべてにおいて強化すること一義とし、それとは反対に古墳背後となる斜面上部・北東側ではできるだけ簡略化しようとする古墳築造計画を端的に示している。



第24図 東久保古墳群1号墳の墳丘と石室 (1:100)



第25図 東久保古墳群1号墳の根石と基礎地形 (1:100)



第26図 東久保古墳群1号墳のセクションと玄室立面 (1:100)



写真49 東久保古墳群1号墳の立地（南上空から）



写真50 盗掘後に埋め戻された石室（南西から）

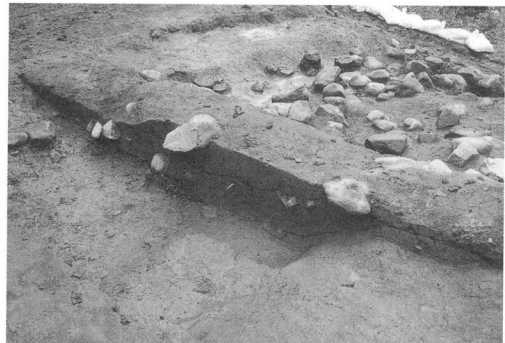


写真51 周溝E-Fセクションと崩落礫（北西から）



写真52 周溝C-Dセクションと崩落礫（南東から）



写真53 西斜面C-Dセクションと崩落礫（南東から）



写真54 玄室に詰め込まれた礫（東西セクション）



写真55 玄室に詰め込まれた礫（南北セクション）



写真56 西側外護列石と崩落礫（南西から）



写真57 盗掘後に整地された玄室床面（南から）



写真58 東久保古墳群1号墳全景（南上空から）



写真59 東久保古墳群1号墳の石室平面（上空から）



写真60 東久保古墳群1号墳の石室立面（南から）



写真61 西側外護列石と石室立面（南西から）



写真62 玄室の礫床（北から）



写真63 罫出土状態（北東から）

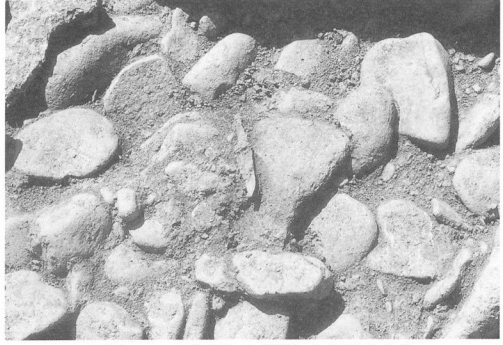


写真64 刀子出土状態（南西から）



写真65 東側壁石と裏込め石（南西から）



写真66 西側壁石（東から）



写真67 羨道部根石（南から）



写真68 羨道部根石（北から）

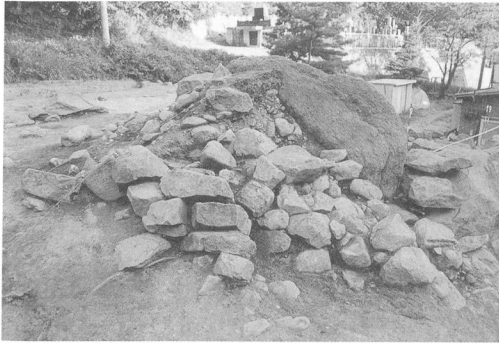


写真69 奥壁裏込め石（北から）



写真70 奥壁裏込めセクション（西から）



写真71 玄室東側壁裏込め石と盛土（北から）



写真72 玄室東壁裏込め石と盛土（南から）

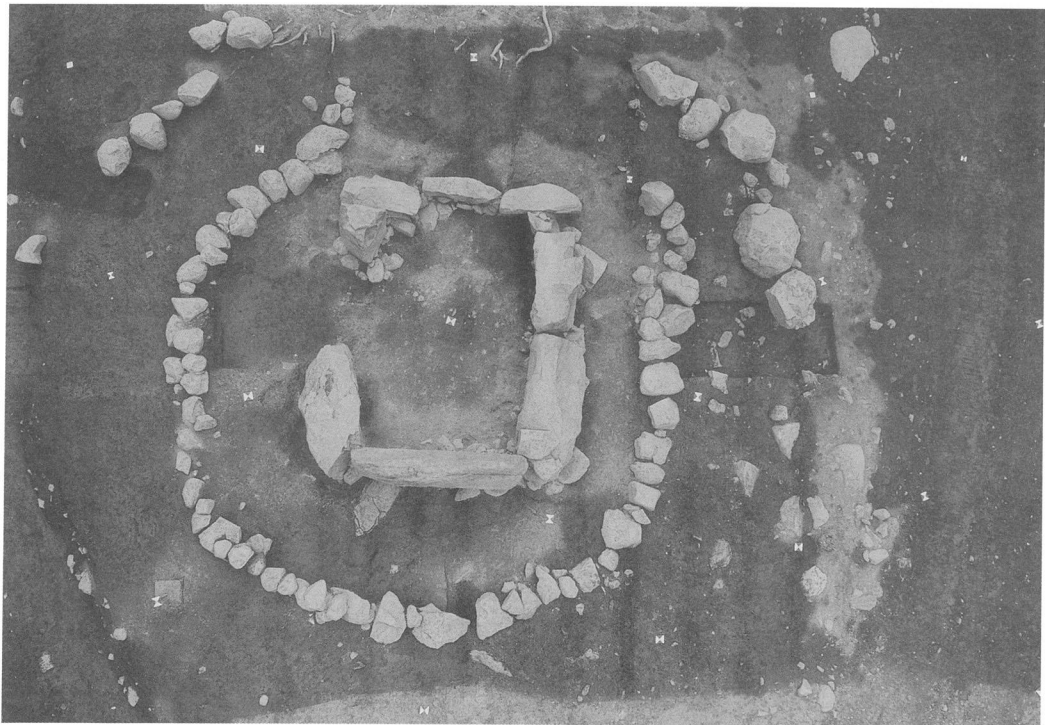


写真73 内周りの外護列石（北上空から）



写真74 根石立面（東から）



写真75 根石立面（西から）



写真76 根石立面（北から）



写真77 外護列石と盛土（北から）

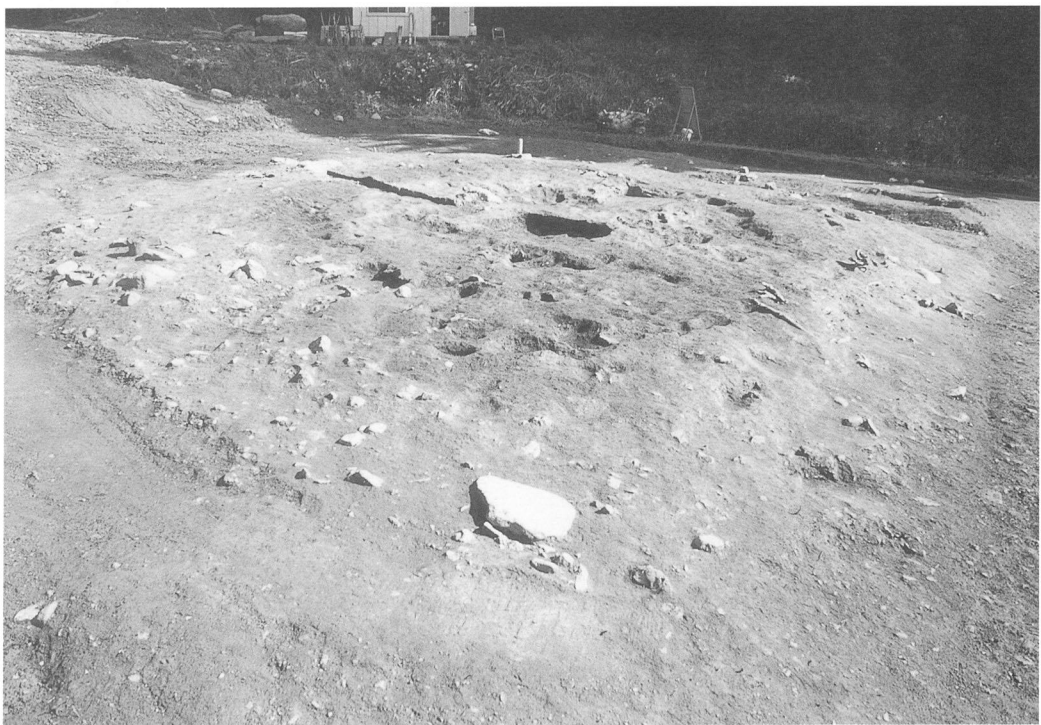


写真78 基礎地形（南西から）

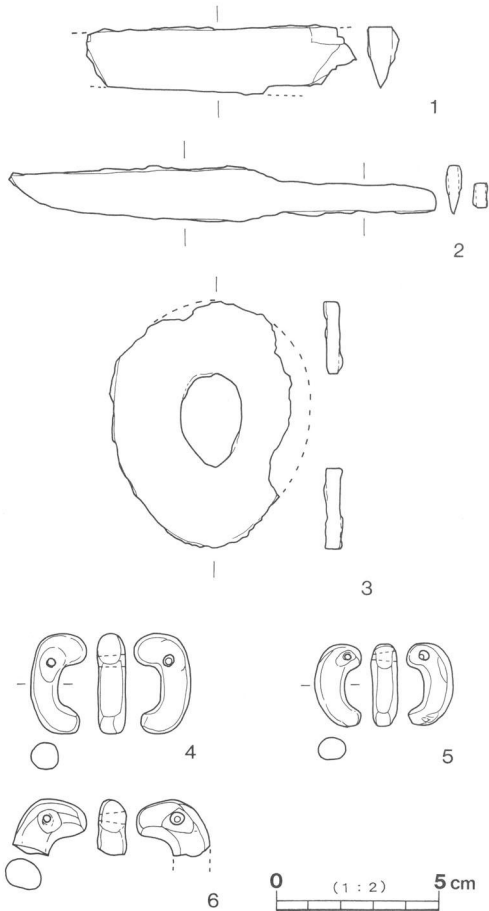
3 東久保古墳群 1号墳の遺物

東久保古墳群1号墳から検出された遺物は、石室に納められた副葬品や古墳築造以後の遺物からなり、後者が主体を占める状況にある。それは、前述したように度重なる盗掘で、玄室礫床がほとんど取り除かれ、人骨すら残されていなかったことを要因とするが、後世において石室等が利用されたことも暗示する。

玄室内においてはほぼ原位置に残されていた遺物は、西玄門付近の礫床から検出された長さ130mmの刀子(第27図2)と長さ75mmの鏝(同図3)、そして長さ25mmの

メノウ製勾玉(同図5)である。また、その形態から本来石室に副葬されていたと考えられる遺物に、玄室中央の盗掘坑から出土した現存長83mm・幅20mmの直刀破片(同図1)と長さ30mmの蛇紋岩製勾玉(同図4)、そして古墳西裾斜面・調査区西端のⅡ層から検出された現存長17mmのメノウ製勾玉破片(同図6)があった。

玄室内における当該期の土器は皆無であったが、古墳西側斜面のⅡ層、東側周溝を埋めるⅡ～Ⅳ層において、大まかに7世紀代と考えられる須恵器大甕胴部破



第27図 東久保古墳群1号墳の鉄器と玉

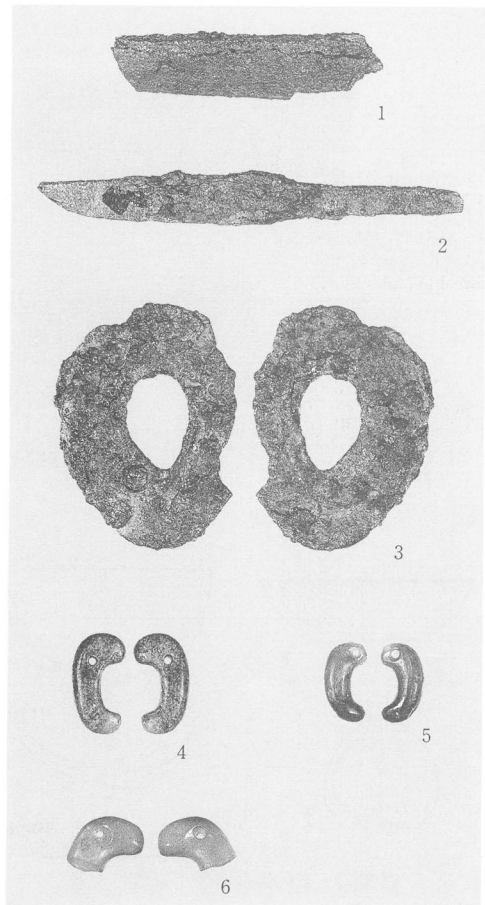


写真79 東久保古墳群1号墳の鉄器と玉

表9 東久保古墳群1号墳鉄器・玉一覧表

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
1	直刀	鉄	*83	20	8		盗掘坑	
2	刀子	鉄	130	15	4		玄室礫床	
3	鏝	鉄	75	△60	4		玄室礫床	
4	勾玉	蛇紋岩	30	17	8	5.6	盗掘坑	
5	勾玉	メノウ	25	14	7	3.65	玄室礫床	
6	勾玉	メノウ	*17	*22	9	4.03	西斜面Ⅱ層	孔長29・幅19

片が崩落した用材礫に混じって、数個体分検出された(第28図)。その出土位置からすれば、墳丘上のいずれかの箇所に捧げられた供物であろうか。

第29図1は底部回転糸切り・内面黒色処理の土師器坏であり、東側の墳裾外護列石中央部付近の外側に接する位置に、完形の状態で見込まれていた。また同図2は灰釉陶器小瓶であり周溝底部から検出されている。これらは9世紀末葉から10世紀初頭のものと考えられる遺物であり、平安時代において、詳細は不明であるが何らかの行為を本古墳に対して行っていたことを示唆している。

第29図3は瀬戸美濃碗、同図4は瀬戸美濃灰釉碗で

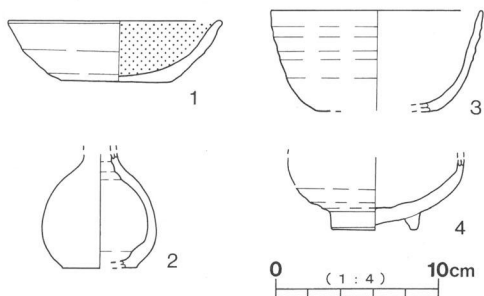
ある。おおむね18世紀の遺物であろう。共に、石室内②層から出土している。

第30図は石室内②層及び③層上面から出土した流紋岩製の砥石である。一部は古墳時代の遺物で、盗掘時に放棄されたものが石室内に埋め戻されたとも考えられるが、同図1は後世において石室が利用されたことを示す炭化物・焼土層である整地層上面に置かれた状態で検出されている。

第31図は唐代に製造されたとされる開元通寶で、中世にもたらされたものと思われるが、石室内②層から検出されている。



第28図 東久保古墳群1号墳の須恵器



第29図 東久保古墳群1号墳の土器

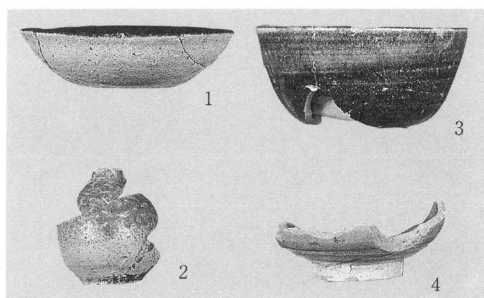
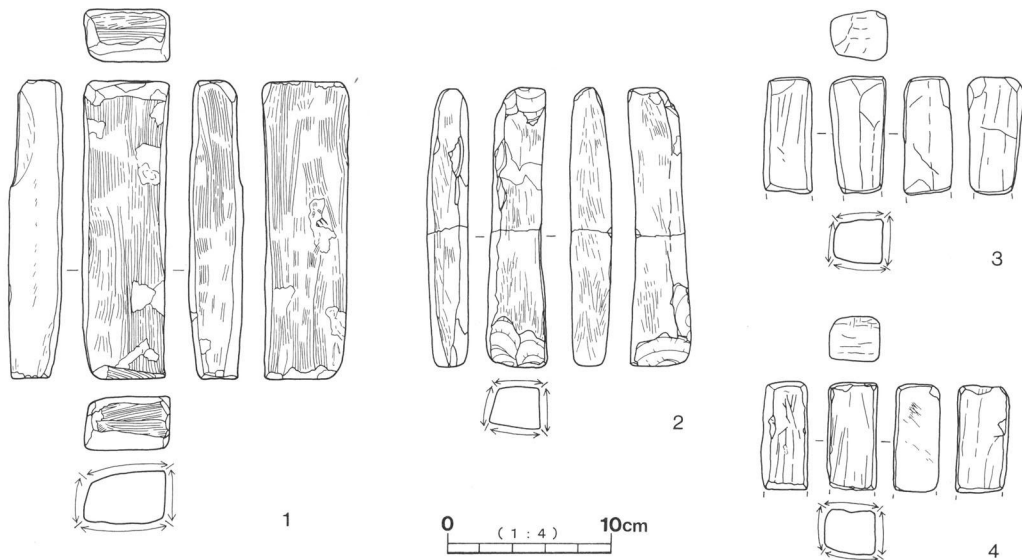


写真80 東久保古墳群1号墳の土器

表10 東久保古墳群1号墳土器一覧表

番号	器形	口径	底径	器高	成形・調整		出土位置	備考
					底部	内面		
1	土師器坏	133	68	38	底部：回転糸切り	内面：ヘラミガキ→黒色処理	東外護列石	完全実測
2	灰釉小瓶		△45	*69	底部：回転糸切り		周溝	回転実測
3	瀬戸美濃碗	△13		*61			玄室	回転実測
4	瀬戸美濃碗		52	*43	灰釉		玄室	完全実測



第30図 東久保古墳群1号墳の砥石

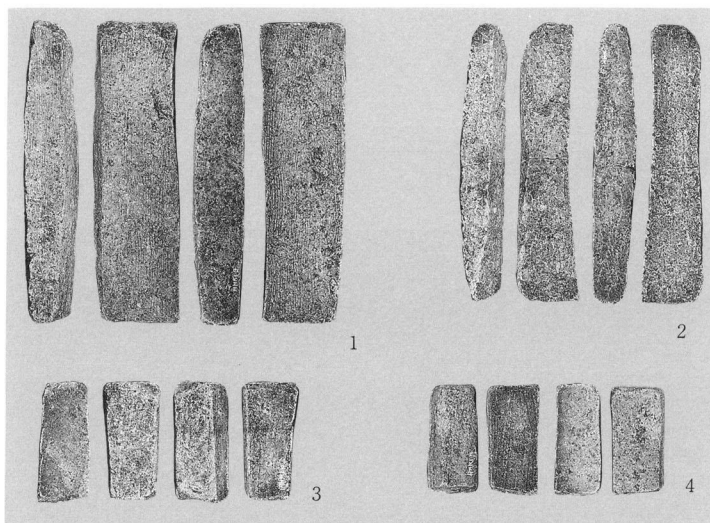
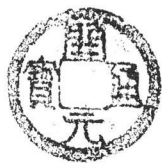
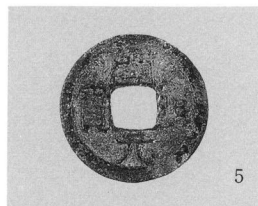


写真81 東久保古墳群1号墳の砥石



5

第31図 東久保古墳群1号墳の古銭



5

写真82 東久保古墳群1号墳の古銭

表11 東久保古墳群1号墳砥石・古銭一覧表

番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
1	砥石	流紋岩	180	50	32	516.87	玄室	
2	砥石	流紋岩	169	36	25	213.61	玄室	欠損接合
3	砥石	流紋岩	72	34	30	108.3	玄室	欠損
4	砥石	流紋岩	65	30	27	102.48	玄室	欠損
5	古銭	銅	2.4	2.4	1	2.51	玄室	開元通寶

V 宮田遺跡Ⅱの調査

1 調査の概要

遺跡名 宮田（みやた）遺跡Ⅱ 略称 SMTⅡ

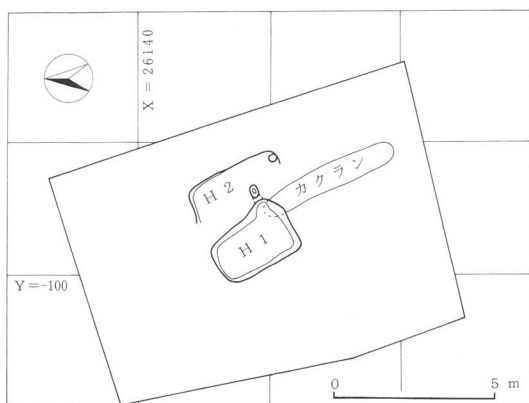
発掘調査面積 86.6㎡

所在地 長野県佐久市大字瀬戸字宮田2374-55

検出遺構 平安時代竪穴住居址 2軒

発掘調査期間 平成13年10月31日～同年11月2日

出土遺物 須恵器杯・杯蓋・甕、土師器甕



第32図 宮田遺跡Ⅱ遺構全体図（1：200）



写真83 宮田遺跡Ⅱの地形（西から）

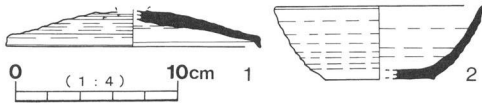


写真84 宮田遺跡Ⅱの遺構（西から）

2 平安時代の竪穴住居址とその遺物

(1) H1号住居址

緩斜面において地山である黄褐色土を検出面として確認された竪穴住居址である。カマド右の南東隅壁上部が近世の炭焼き跡で破壊されている。斜面に直行する南北方向に主軸がある長方形のプランで、現残値では長軸230cm・短軸122cm・床面積2.8㎡を測る小形の住居址である。但し、斜面上部では壁残高60cmと構築状態に近いが、下部では明らかに削平されており、壁上の立ち上がりを僅かに確認したが、覆土3層は堀方埋



第33図 H1号住居址の土器

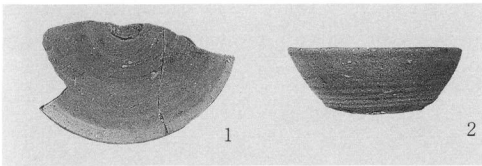
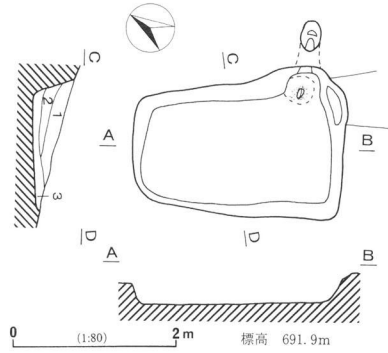
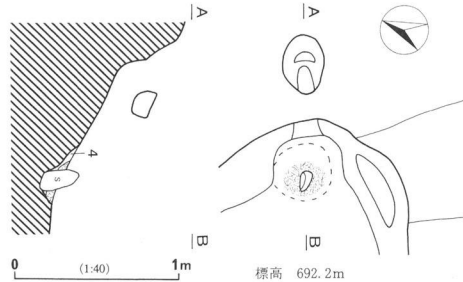


写真85 H1号住居址の土器



- 1層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土粒を多量に含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土粒を含む。
- 3層 褐色土 (10YR4/4) 黄褐色土ブロックを多量に含む。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化物・焼土を多量に含む。



第34図 H1号住居址

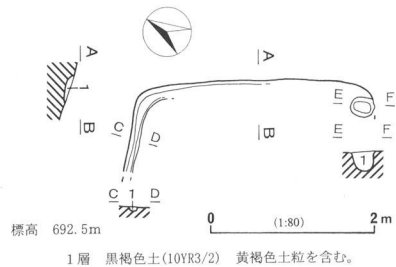


写真86 H1号住居址 (西から)

土的なあり方であることから、南側に広がりがあった可能性がある。

柱穴・周溝は存在しなかったが、東南隅で主軸方向がN-70°-Eであるカマドが確認された。燃烧部は長さ12cmの支脚石が残る40×40cm程の規模で、天井部を有し34度の傾斜で立ち上がる、長さ60cm程の煙道部がある。

遺物は少なかったが、カマド右前方床面に須恵器坏蓋・須恵器坏・須恵器大甕破片数片が廃棄されていた。第33図1は口径推定長156mm・器高22mmの天井部が回転ヘラケズリされた須恵器坏蓋である。同図2は口径推定128mm・推定底径66mm・器高45mmの底部が回転糸切りされた須恵器坏である。



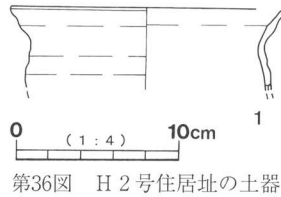
第35図 H 2号住居址

(2) H 2号住居址

H 1号住居址に切られる位置の斜面上部で地山を検出面として確認された。確認された箇所は最大残高4cm・長さ290cm程の東壁部分と幅5cm・深さ5cmの周溝を有する北壁の一部である。また、東壁南隅に27×22cm・深さ25cmの柱穴が存在していた。但し、斜面部による削平が大きく、これらの遺構が住居址として確定できるのかという疑問は残る。

遺物は上記の範囲で、土師器甕破片が検出されている。第36図はロクロ成形された土師器小形甕の口縁部破片である。推定口径164mmを測る。

以上、H 1・2号住居址の形成時期は、その遺物から9世紀前半と考えられようか。



第36図 H 2号住居址の土器

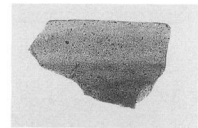


写真87
H 2号住居址の土器



写真88 H 2号住居址 (西から)

VI 調査のまとめ

1 東久保遺跡の弥生時代後期集落

東久保遺跡では佐久総合運動公園整備事業とそれに伴う道路改良事業によって尾根頂部平坦面から南緩斜面にかけて面積約4,300㎡の調査が行われた。その結果、竪穴住居址12軒、掘立柱建物址1棟、土坑4基、溝状遺構3本が検出された。

これまでに報告したようにH1号～H3号住居址は東久保遺跡Ⅰとして、H4号～H12号住居址は東久保遺跡Ⅱとして調査されたが、これらの竪穴住居址は同一の空間に切り合うことなく整然とした配置で存在し、形成時期は弥生時代後期に限定されていた。

東久保遺跡Ⅰで調査された尾根頂部を南北に縦断するM1号溝状遺構はH1号住居址を破壊し、覆土から平安時代の須恵器破片が検出されている。また、F1号掘立柱建物址はM1号溝状遺構を切る。以上のことから上記の遺構は弥生時代より後世に形成されたと考えられる。また、東久保遺跡Ⅰで検出されたM2・3号溝状遺構もその形状から、近世の可能性も考慮して後世の形成と考えることが妥当であろう。

頂部平坦面で検出された径70cm・深さ30cmのD1号土坑は円形を呈し遺物は検出されていないが、H3号住居址を切る。南斜面で検出されたD2～4号土坑は、陥し穴的配置と形態であるが底部施設がなく性格は不明である。遺物はD4号土坑覆土上層から弥生後期土器が検出されたが、堆積時の流れ込みが想定され形成時期は特定できない。現状では土坑と住居址群の関連は積極的に評価できない。

以上から、東久保遺跡は弥生時代後期の住居群からなる単一集落として評価しておきたい。そして、沖積地から50m近い高所に形成されている点が課題とされよう。所謂「高地性集落」問題である。

検出された竪穴住居址は主軸方位・形状・規模・配置を基準に、大きくA・B群に区分することができる。

A群は主軸方位が南北方向にあり、主軸方向が同様な主体炉が北壁側に位置する住居址である。H2・H3・H4・H6・H7・H8号住居址の6軒がある。

矩形を呈し床面積19.6㎡にあるH8号住居址はB群の形状・規模にあるが、他は長軸（南北）長が短軸（東西）長の1.4倍前後にある長方形プランを呈し、床面積は28～39.2㎡の規模を有する。A群の住居址はすべて標高731～731.5mの尾根頂部平坦面に存在し、最大規模のH4号住居址を中心として横並びに一定の間隔で配置されている。長軸長710cm、短軸長500cm、面積33.5㎡にあるH2号住居址では、鉄鏃5個・ガラス小玉4個が検出されている。

B群は主軸方位が東西方向にあり、同様な主軸方向を有する主体炉が東壁側に位置する住居址である。H1・H5・H9・H10・H11・H12号住居址の6軒がある。削平により全容が知れる住居址が少ないが、長軸（東西）長が短軸（南北）壁の1.2倍前後の長さにある矩形プランを呈し、床面積は15～24㎡程度にあったと思われる。H5号住居址が標高731mの尾根頂部平坦面に存在する以外は、標高730.5～729.5mの南緩斜面に一定の間隔で横並びに配置されている。斜面地におけるB群は地形的制約に要因があらう。

以上にA・B群個々の特徴を見たが、A・B群の住居構造は基本的に同等であると評価できる側面を有している。すなわち、炉は方向を異にするが支柱穴P1・2中央に位置する。H2・H6（A群）とH1・H10（B群）では炉手前に縁石を有する。支柱穴は4本で、南壁（A群）・西壁（B群）に位置する出入口施設相当の左右いずれかに、貯蔵穴様の小土坑を有する（A群：H2・H3・H4、B群：H5・9）点である。

各竪穴住居址で検出された土器には良好なセットと点数がなく、かつ風化による損傷で十分な観察は行えなかったが、概ね弥生時代後期箱清水式の前半期と考えられ、極端な時期差は想定できない。ここでは、さらなる検討を有するが、以上に触れたA・B群の竪穴住居址は時期差を示すものでなく、その規模と配置の解釈は今後の課題とするが、同時期の集落像として理解しておきたい。

2 東久保古墳群 1号墳と佐久東部山麓「山寄せ古墳」

東久保古墳群 1号墳は佐久平東縁に展開する佐久東部山麓の山裾を葬地とする所謂「山寄せ古墳」である。この佐久東部山麓の山裾南斜面や東久保古墳群 1号墳の立地である平地に接する谷中斜面には、古墳時代後期後半から奈良時代（7世紀後半から8世紀前半）にかけて築かれた数多くの群集墳が存在している（第4図参照）。造墓活動の場所として佐久東部山麓が選ばれた理由は、こらまでに繰り返して述べてきたように、当地が古墳石室構築用材として極めて有効な石材環境にあったためである。

1号墳は想定5基からなる東久保古墳群において最大の古墳であった。推定される墳丘規模は直径10mの円墳であり、石室は長さ5.6mを測る巨石を用いた横穴式石室であった。玄室規模は長さ3.3m・幅1.8m・面積6㎡を有していた。石室の平面形は両袖型で玄門部を有し、その玄門部は左右の立柱石から構成されていた。玄室側壁積みのあり方は東西側壁において2個単位の腰石積みが確認された。奥壁積みの現状は一枚の巨石からなる。

以上に見た石室の諸特徴は、佐久地域の横穴式石室ではもっとも普遍的なあり方である。本古墳の東側1.5kmの山麓南斜面に築造された長峯古墳群（第4図）では第1号墳と第5～8号墳の円墳5基が発掘調査されているが、いずれの石室も両袖式で玄門部に立柱石を立て側壁積みに腰石を用いるタイプで、東久保古墳群 1号墳の石室と同タイプであった。また、本古墳の北側1.8kmの山麓に位置し、尾根頂部末端部に築造された単独墳である寄山古墳（同図）の石室も同様なタイプである。長峯古墳群で発掘調査された古墳の玄室規模は、長さ2.2～2.8m・幅1.2～1.9m・面積2.7～5.5㎡にあり、寄山古墳の玄室規模は長さ3.2m、幅2.5m・面積8㎡である。つまり、東久保古墳群 1号墳の玄室規模は尾根頂部を葬地とする単独墳の寄山古墳には及ばないものの、長峯古墳群などの東部山麓に形成された群集墳では最大クラスに属する。そこには人骨すら確認できなかった被葬者の当地域における地位と築造時期が暗示されていよう。それでは、築造時期と東久保古墳群 1号墳が有する「山寄せ古墳」における歴史的意

義は如何なるものであろうか。

東久保古墳群 1号墳から検出された遺物には、玄室内に残された築造時期の土器は皆無で、築造時期が知れる数少ない遺物として玄室に副葬された直刀・鐔・刀子・勾玉があり、墳丘に供された須恵器大甕破片があった。これらは概ね7世紀代の遺物と推定され、勾玉の副葬から7世紀末葉までは降らないと考えられるが、詳細な時期を特定できるものではなかった。

そこで、以上に見た玄室の形態に注目すると、「立柱石を立てる両袖タイプの石室は7世紀中葉から8世紀代までの築造が多く、尚かつ大型の石室は7世紀中葉を中心とした時期に築造が集中し、小型の石室は主に7世紀末から8世紀前半の築造が推定されている。」（富沢 2000）という富沢一明の見解に従えば、7世紀中葉以降で7世紀末以前と考えられようか。

前述の寄山古墳の築造時期は、出土遺物と石室形態から7世紀第Ⅲ四半期と考えられている。また、長峯古墳群で発掘調査された各古墳の築造時期は、同様な根拠から概ね7世紀末から8世紀前半頃と考えられている。尾根頂部に築造された単独墳である寄山古墳が、平地部に築造された大型単独墳から「山寄せ古墳」に移行する最初の姿（宇賀神誠司 1995）で、それ以降、「山寄せ古墳」が長峯古墳群などの群集墳として爆発的な勢い東部山麓に形成されたとするならば、東久保古墳群 1号墳も初期「山寄せ古墳」形態の一つとして歴史的評価が与えられよう。ところで、本 1号墳は山裾斜面に小規模な古墳として築造された東久保古墳群における他の古墳とは明らかに異なっており、東久保古墳群という群集墳の評価ではなく、葬地を平地に接する谷中斜面に移した初期「山寄せ古墳」における単独墳としての評価に重要な意義が見出せるのである。

引用参考文献

宇賀神誠司 1995 「寄山古墳の調査」『寄山』

佐久市教育委員会

富沢一明 2000 「信濃、千曲川流域における横穴式石室の導入と展開 —東信地域を中心として—」

『専修考古学』第8号

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第116集

東久保遺跡Ⅱ

東久保古墳群1号墳

宮田遺跡Ⅱ

長野県佐久市大字平賀東久保遺跡Ⅱ発掘調査報告書

長野県佐久市大字平賀東久保古墳群1号墳発掘調査報告書

長野県佐久市大字瀬戸宮田遺跡Ⅱ発掘調査報告書

2004年3月31日

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市大字中込3056

連絡先 文化財課

〒385-0006 長野県佐久市大字志賀5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 株式会社 中信社
